冬雷

短歌雑誌　TOURAI

二〇二五年一月一日発行（毎月一回一日発行）第六十四巻第一号（通巻七五五号）

1 月号・2025 年

表紙絵について

さくら咲き辛夷の白い花の立ち寒きながらの
四月の初め　　大山敏夫

堰堤に桜咲くを歩き見るくもり空には花のみ
明るし　　兼目　久

続けざまに夫とその母見送りて火葬場に見る
散りゆく桜　　髙橋説子

いくつかの桜にまつわる歌を書き出してみました。

今、佐野近辺の桜が大ピンチになっています。田沼高の並木の桜も秋山川の土堤の桜も枯れて伐採されました。唐沢山の桜の木が立ち枯れしているのが見えます。クビアカツヤカミキリ虫のせいでしょうか？　日本中にひろがらなければ良いと思っています。

〈りつこ〉

1月号　目次

冬雷集……1
作品一……18
一月集……34
残響集……39
作品二……50
作品三……55
十一月号冬雷集評……山本三男…15
十一月集 / 残響集評……大山敏夫…33
『形容詞・形容動詞の短歌コレクション 1000』紹介……桜井美保子…41
十一月号作品一評……小林芳枝・藤田夏見…16
十一月号作品二評……井上菅子・江波戸愛子…44
十一月号作品三評……桜井美保子・橘　美千代…46
十一月号十首選（冬雷集・十一月集 / 残響集）……48
十一月号十首選（作品一・作品二・作品三）……48
歌集・歌書紹介……佐藤靖子…53
古川陽子歌集『顔あげて』……小林芳枝…56
句画集『私の物語 はなのとき』について　……大山敏夫…59
「青南」終刊号を読む ……62
島木赤彦の一首鑑賞　8……赤羽佳年…63

表紙絵《さくら》りつこ ／ 題字　田口白汀

冬雷集

大山　敏夫　埼玉

一年をさくらの花にはじむるは幾年ぶりか今年の表紙
八年前の満開さくらの輝きもさにつらふこの花びらも良し
よろこびのおもひ満ち満ち弾けくる歌累累の寿ぎの花
季を得て幹の艶めくいきほひがこの絵にも、おお細胞騒ぐ
もつと早く始めれば良かつたといふことの多くて躰の追ひつき難し
橋を渡り来たるところの歩車分離信号交差点全車が止まる
渋谷スクランブルのやうにはならず歩車分離信号交差点横断者四人
下半分赭く照る月前方の家並に低し夜半の国道

負の遺産　　赤羽　佳年　東京

負の遺産ばかりの処理に苦労する一年がありて疲れが残る
負の遺産ばかり抱へて年越しか酒も進まずこの酒好きに
墓じまひ初めての事誰もゐず聞く者もなく業者に頼む
墓じまひ半ばの儘に年を越す名も顔を知らぬ者の骨壺
雨あがり陽の射すところに湯気あがりほやほやとして心地良きかな
あはあはとゆげたちのぼり昼の原遊ぶものなし芝が勢ふ

朝夕を点す仏壇父母の隣におととの小さき位牌
わが思ひ歌に遺さんとこれまでも詠んで来たりしが幾多が遺る

赤　間　洋　子　東京

三回シリーズの「隣町を知らうウォーキング」参加者の多くはシニアの女性
先導の体操の師のすぐ後を離れずに歩く話聞きつつ
調布飛行場見下ろす丘で休憩するも飛行機飛ぶを見ることできず
広大な林の中なる三鷹天文台日本最初の天体望遠鏡見学
今回の終点は神代植物公園バラ園の花は盛りを過ぎて
温室には珍しき品種のバラがあり色も香りも大きさも数多
解散後師と共に神代そばを啜りて一人前を持て余しをり
帰宅して歩数計を見れば一万三千歩余り第二回目の参加も申し込む

兼　目　久　栃木

半紙の右払ひをどう収めるかぶつかり合ひて苦労したり
空海の風信帖を開くたびその筆跡の奥深さを知る
ガムをかんだりひまはりの種をかんだり両監督は口を動かす（WC開幕）
桜の葉は霜月となりみな落ちぬ根元には葉の落葉積もれり
若きときバッティングセンターで剛速球を待ちてゐるとき顔面をよぎる
軒下の赤と黄色のおしろい花夜の闇の中咲き出してゐる
八十を越えたる我の運転に妻は憂慮し免許返納を
竹を組みビニールをかぶせ水を通す簡易水路のアフリカの村

ビルに副ひ百日紅の白花が夏惜しむ如咲きつぎてをり
み社の枝垂桜の紅葉が始まり吾の楽しみ一つ増えたり
木犀の香る季節を待ち詫びてしばらく園に坐りてゐたり
良いニュース無きこの頃に嬉しさは大谷五十四号ホームラン
娘と二人大谷ホームランに娘は鳥肌がたつと喜ぶ
日当りの良き欅の葉の中もぐり込んだりして遊んでゐるのか雀
面白い雀の遊び楽しさうもぐりこんだり葉先にゆらり

山　﨑　英　子　東京

生さんま一尾を買ひて舞茸の炊き込みご飯に秋を満喫
細身なるさんまは油すくなめで物足りなさを感じつつ食ぶ
花梨の実熟れたる色の暖かく枝を埋めて揺らぐともなし
熟れたる実つつきに寄りくる鳥をらず花梨の木立ただ静かなり
猛暑の日々茎の生長止まりたる皇帝ダリア丈高く伸ぶ
茎伸びて高きにあまたの蕾ゆる皇帝ダリアの開花待ちをり
待ちゐたる皇帝ダリア花開き大小の蜂せはしく飛び交ふ
蔓太き糸瓜に大き実の下がり朽ちたる皮剥け繊維の見える

森　藤　ふ　み　東京

地域コミュニティ
五十八階ビルの住人わが町と繋がり持てるか課題の一つ
町会に入りたる高層住宅民と今後如何にせむ地域コミュニティ

櫻　井　一　江　東京

消防署消防団員の力借り人ら集まれるイベントの計画
会場をタワーマンションの庭に決め町会主催の防災訓練
マンションの庭に防災釜戸ありて災害時利用の組み立てする署員
消火器やＡＥＤの使ひ方にマンション住人も加はりて居り
「新住民」「地元民」の言ひ回し止めにして融合のチャンス作らむ
超高層ビル建つ説明受けゐし頃の不安は便利さに上書きされゆく

有泉泰子　山梨

公園に「甲府市のうた」流れくる子等帰り行き一人夕焼け
五時なれば列なす車にライトつく家路に急ぐや健やかであれ
久しぶりふくふく温泉に老二人遠くの山々青空にとけ
駐車場に並ぶは殆ど県外車東京神奈川九州もあり
ボランティア閉会近づき記念にと「おいしいおかず」二号出版す
朝焼けの富士の頂やはらかにほんのり白く光るものみゆ
十一月半ばとなるもあたたかし初冠雪の富士眺めて歩く

冨田眞紀恵　富山

被災地に咲いたヒマハリがんばつてと言ふが如くに黄のほほゑみぬ
老いに負けない私になりたいと思ふ日々にて今日もくれゆく
それぞれの色に木の葉のゆらぎつつ秋もいよいよ深みゆくかな

青木初子　神奈川

世帯主吾に変はりて真つ先に遣らねばならぬ名義変更

銀行の通帳見つつ書き写す一年の間に引き落とされるを
月毎に引き落とされる諸経費の名義変更意外に多し
引き落とし早きところより電話する夫の死悲しむ心押へて
数日をかけてバラバラ届きたり名義変更申請書類は
必要な添付書類は一様にあらねば度々コンビニに行く
火災保険五年の期限間際とぞ重き書類の届き驚く
予定せぬ火災保険の手続きに昼食の後も眠気の起きず

黒田江美子　千葉

十年来友の実家に栽培の新高梨を購ひ味はふ
例年は幼の頭ほどに成る新高今年は八割廃棄と
二三年猛暑に収穫減少し新高梨に異変ありたりと
梨農家の担ひ手不足に支援策花摘みボランティア募集始む
買ひ物に付き添ひ呉るる子の選ぶ糧にこの頃魚増えたり
検査前日の我が食材の麺とパン子は探しゐる塩分ゼロを
長ネギを折りて詰めれば痛ましと子は形状を元に戻せり
玄米麩と鯉のうま煮は子の土産伝承手造り味はひ深し

中村晴美　茨城

寒さ増し腕の上がらぬ肩痛し五十肩かな還暦なれど
左肩にカイロを貼りて養生す五十肩の終はりの見えぬ
右肩が夫は痛しと言ひ出して夫婦揃つて初の五十肩

味気ない電子書籍に長所ありスマホに読めて紙ゴミ知らず
懐かしの『ガラスの仮面』スマホにて半月に読む四十九巻
懐かしの昭和漫画満載のスマホアプリに新たな楽しみ
足場外れ白き外壁現るるリフォーム店舗今度は何屋か
台風の四つが南に発生すひとつは来るか十一月ぞ

橋　本　文　子　鳥取

丸亀の姪に会ひたしと語らねど娘と夫君旅を企画す
定年まで保育園長勤めたる姪は育ちをり優しき人に
姪と我が子思ひやり深く育ちゐて話豊かに一日過ぎる
瀬戸内海車で渡る大橋は姉若き頃あらざりしもの
一生の思ひ出となる瀬戸大橋車にて過ぎ深き思ひ出

吉　田　綾　子☆　茨城

夫の為に踏段、手摺を取り付けぬ何時しか我も助けられおり
さすが秋夏日に喘ぐ日々なれどかかる時雨に落葉散り敷く
いそいそと病む身を忘れ意気込みぬ夫を連れ行く衆議院選挙
急激に押し寄する寒気に惑いぬ暖房器具のなべて稼働す
久しぶりに実家に来る妹はまず仏壇にお香を焚きぬ
老いて尚ふる里実家が恋しいと娘を連れに義妹（いもうと）の来る
ふる里にきたる妹嬉しそう幼き日々を頻りに語る
降霜の遅きを願い日に幾度うす紫の花を眺めし

第六十三回冬雷大会

山　口　嵩　福島

久々に出づる大会活気満つされど見えざるA氏にT氏
大会の楽しみ批評の交し合ひ山の姿も角度で変る
誌上にて名前おぼえし人々と話す楽しみ大会なれば
思ひ入れ強きがゆゑの難解歌批評聴きつつ「なるほど」と思ふ
批評にも批評者視点の窓あらむ高層の窓低層の窓
批評など聴きつつ偲ぶK先生先生ならば何と評せむ
毎号の歌より推知詠者像あひて語れば隔たり楽しき

酒　向　陸　江☆　東京

ユリの花庭一面に咲きし場所わずか百四十坪に十階建のビル
建上がり入居せぬうち解体の決りしビルは廃墟のごとし
解体と決りし後のビルの景無機質なれど痛々しかりき
なにゆえか一年かけての解体と発表あれど意図は解らず
朝よりビル解体の音響く高所に黙々孤独が見ゆる
十階建十八世帯の目論見が泡と消えゆく騒音と共に
建設時の工事音より解体音激しく聞ゆる吾のみなるか
友寄りて慰め合いて語り合い騒音なんぞ笑うしかなし

天　野　克　彦　大阪

折に触れて
若月は秋の景色によく似合ふ遠くけぶれる山のしづけさ
ねむられぬ夜のつれづれを西鶴の一代男読みて過ごしぬ

ふたたびの四国遍路を思へども八十翁には行き難きかな
法然の「一枚起請文」ありがたや念仏(ねぶつ)申せば往生極楽（黒谷・金戒光明寺）
落柿舎の夕空翔けゆくからすども小倉の山に塒するらし
「赤光」の初版の日付とわが生(あ)れし日付と同じを知りてよろこぶ（十月十五日）
淀川の葦辺をゆけば志貴皇子おもひだされてその歌うたふ
これまでに世話になりたる人の名を想ひ出すままノートに記す
広辞苑片手に持つこと難くなりもろ手で戻すわが本棚に

秋分から　　高　松　美智子☆　栃木

浴室で腹を下して意識遠のく姑を抱えて主治医の元へ
急激な血圧低下の意識低下高齢者にはよくあることと
グループホームの夜勤の様なふた晩を過ごした翌朝の三十八度九分
常ならぬ頭痛発熱けんたい感抗原検査の二本の朱線（自身のコロナ罹患）
嗅覚に触れる異和感正体は憩室失血と夜中に気づく（姑の入院）
大量の下血に驚くこともなし憩室出血四度目となれば
三日間の輸血を終えて姑の顔に戻れる血の気と活気
食を絶ち点滴治療の姑に氷さとうと塗り絵を差し入る
入院中の姑の部屋に陽を入れて風を通して退院を待つ

高　橋　説　子　栃木

朝霧のみるみるうちに消えゆきて歌ひとつ詠むとき呉れずなり
池の渕に立つ吾に向かひ銀色のさざ波ゆらし鯉の寄り来る

仏壇に向かぬが夫の好きだつた紫式部の小枝をひとつ
ポロポロと畳に落ちたる紫の粒を掃きつつ写真にアカンベー
引き出しの夫のスマホが捨てられぬ使ひこなせぬままにきれいで
添へられたる櫛切りレモンが搾れない治る日来るのかこの腱鞘炎
同い年の人の白髪潔し吾はも少し抗ふとする
佐野行きは満席満席三バス待ち大会ばなしで乗り切る三時間
わが歌に一票くださりありがたう無記名互選はギャンブルの味

大　塚　亮　子　東京

起き出だし雨戸を開けて空模様確かめ洗濯機のスイッチ入るる
隅田川の花火大会楽しみに十一階に仮住ひする
越し来たる部屋より花火は見ゆるなし街中に見る打上げ花火を
朝々に犬に引かれて散歩する男をりいつも決つた時間に
校庭の隅に小さき畑ありトマトキウリを児童が育てる
静寂は良しと思へど騒音に心休まる時もありたり
雨の音聞きつつ本読む事は好き木の葉を揺らす風の音も好き

山雀　　嶋　田　正　之　埼玉

昨日まで暑い暑いと口癖の急に噤みて羽織るジャンバー
空を突く曙杉の天辺に寒くなるぞと百舌の高啼く
暗渠道の植ゑ込み沿ひを渡りゆく四十雀目白の小群れ
何処から来るや一羽の山雀の透き通る声飛行機雲のぶ

露に濡れ光る小さな草むらに寂しさ帯ぶるコホロギの声
庭先の月下美人に花芽見ゆ四年連続またまた嬉し
一年に一度ひらきて数時間誰に見すとて香り放つや
花の咲く短き時を愛しまむ逢へる時間の少なくなれば
別名をナイトクイーンと呼ぶといふ成程見事な命名ならむ

江波戸　愛　子☆　埼玉

カボメティクス週に三日の服薬となりて夫の食欲もどる
七時半にならねば開かぬ癌研の入り口前の列に加わる
免許証かえした夫の貰いたるタクシー券をいまだ使わず
最寄り駅までに見えない境界線ありてそれより他の市に変わる
家までの道をあなたと歩みゆく歩幅を合わせて話しながらに
玄関も自転車置き場も物置も娘はセンサーライトを付ける
知らぬ人ならばインターホンのみの話しにせよと警察官は
固定電話は留守番設定した方が良いと言われてそれにしたがう
二階の部屋の雨戸を使わず過ごし来て今日より娘は雨戸を閉める

稲　田　正　康　東京

ピイと啼く鋭き声のふた声を啼きてゆきたりまた来たらむか
烏らのけふ久びさに鳴き交はしこのひと群れの戻り来べしや
高層の影ひとつ立つうへ高く細きほそき月ひかり増しゆく
ハロウィンのかぼちゃのお化け現れてなほ暑き日の十月となる

ポスターの掲示の場所を作る音あした聞こえて選挙はじまる
石破総理敗れたるやうに新聞いふ誰がやつても負けだつたらう
早すぎたといふ者のあり遅ければ野党連携進みたるにや
端に居て思ふをいふと全体を統ぶるはやはり異なれること

町　田　勝　男　埼玉

朝もやの白きに溶ける秋そばの地平の森まで大花野かな
十一月三日は命日文化の日われにはその日神はいまさず
文化の日君の墓前に一人くればはや幾年ぞわれもすぐ逝く
逝きし時子らは大学・高校生いま二人とも定年になる
孫たちも学業終へて社会人まもなく伴侶をさがす年頃
赤信号背中をおされたやうな気に後ろ振りむくだーれもゐない
ドングリをヂダンボと言ひ烏瓜をキンブルシと言ふ故郷言葉

橘　　美千代　新潟

新田の名のつく部落いくつ過ぎオジロワシ来る潟をめざせり（福島潟へ）
古民家より囲炉裏のにほひ漂へり遠き日の祖父の家のごとしも
土どめの石にならべる赤トンボ手をのばしたら捕まへられさう
菜の花の咲きゐし畑のこの辺りとまるヒバリを間近に見しは
西の森越えて白鳥の声とどく田圃に啄む群れのゐるらし
潟の支流にもやふ小舟あり寝転びて水に揺られてみたき衝動
潟めざし歩めば胸に赤蜻蛉しばしとまりてブローチになる

草わけるわれのセーターにつきてくるセンダングサの棘ある種子は
潟のほとりの観察舎にて望遠鏡みるもオジロワシの姿のあらず

ブレイクあずさ☆　カナダ

女ふたり厨に立てば動線のしばしば絡まる親子にありても
母と乗る東西線から中央線父ありし日をぽつぽつ話して
十月の甲州街道緑濃しロブソン通りは早や冬の色
アメリカの選びたる道ヒトラーの立ちしかつてのドイツを思わす
大会に集う人々それぞれの笑顔と言葉を心に刻む
賜りたる「月下美人」の絵の重み両手に抱えて飛行機に乗る
わが古きブリュートナーの屋根越しを「月下美人」の上座と決めたり
「月下美人」の秘めたる情熱ガブリエル・フォーレ最後のノクターンの音
憧れの「月下美人」の絵のためにフォーレを弾きぬ音量抑えて

姉川　素枝子　福岡

遅く明け宵はやく来る日の光（かげ）の白くしなりて下がらぬ暑さ
縋らねば歩けぬ足を摩りつつつま問ひの声待つにもあらず
灯籠のそばに一群の白彼岸ただ白じろとにほふはかなさ
けふかぎり今宵かぎりの如き日をかさねて赤し彼岸花あかし
廻はり道して子の見する彼岸花つぼむもありて生きよといへり
芝生刈り櫓を組みて提灯をつりをりガーデン祭りすといふ
コロナ菌五類になりて復活すガーデン祭りに出店の並ぶ

静かなる施設の庭に和太鼓のひびきは天にひろがりてゆく
窓下の大人子供ら食べ飲みし炭坑節踊る祭りの締に

井上　菅子　山形

大振りの志野のぐい呑み「初孫」のぬるめの燗がうまからう
肉厚の手触りしばし楽しみて鈴木蔵志野焼展出づ
いつか共に行かむと言ひつつ果せずに夫は逝きたり志野の窯元
茶の花が静かに白し遠き日に身罷りし人好みたる花
木通の皮油で炒め砂糖みそからめて秋の一品うまし
コミセンの周囲草刈る益荒男は地べたに座りコーララッパ飲み
クレゾールの臭ひのきつき病院も医院も幻白亜の病舎
西の浄土もかく咲くならむ秋日和赤色赤光鶏頭の花
しつかりに「お」の丁寧語付けて言ふ女房言葉いとこそばゆし

古嶋　せい子　熊本

眠りこぬ夜の枕に来る友のいづれも若しもの言はねども
こもりつつ過ごすこの夏せみの声すずめの声も遠くに聞きつ
朦朧とせる頭にて思ふこと歌のかたちになる筈もなし
この秋は遅れて咲ける彼岸花ひがん過ぎより詫びつつ咲けり
知り合ひの名の無きことを確かめてお悔やみ欄のページをたたむ
もう今日は思ふ事さへままならず百人一首のおはこの歌も
土の上を歩くことなどなくなりて足裏やはし浮腫などありて

住みしことある町の名のハルビンの氷まつりの画面美くし
タレントの死の事をいふ画面にて残されたる笑ふ表情

野村　灑子　千葉

今日の食事にカルシウムはありましたかと姑102歳の頃毎食言ひたり
十一月に入りて涼しくなりきたりベッドの裾におくかけ物引き上ぐ
長々と洋服の裾を出しつぱなしに集団の若きが改札を通る
かういふ装ひ方もあるのかと改札口出でゆく若きらの服装をみてゐる
古きビル解体するにそれ相当の重機ありて斧はふりおろされたり
丈低く庭覆ひゐるどくだみ一本抜けばずるずるつながりてくる
迎車の音門外に聞こえ準備できずにゐたる吾割烹着のまま乗り込む

井上　槇子　新潟

寺院にての世代交代入り組みて為す手続きに日にち費やす
事務的な処理の甘さを指摘するかくもこだはる長男を疎む
高齢の筆頭役員この折に交代せむとまた話し合ひ持つ
病む夫の友の好意と宅配の温泉の湯を浴槽に注ぐ
選挙にて人気の候補者の演説場固まり解けずに爪立ちて聞く
この秋の気温降下の寒き朝やまぬ汗なりストレスをかこつ
けぢめなき日々の続きて場当りに夫の服など買ひては顰蹙をかふ
軒ひくく閉店続く屋並にて降りそそぐ秋は雨を伴ふ
生臭き魚を食みて不快感のこれど万葉の恋歌にはまる

（☆印は新仮名遣い希望者です）

十一月号冬雷集評

山本　三男

杖突きて家出たものの投票所の聊かの坂登れず返る　赤羽佳年

お体が不自由な方には、健常者には分からないような些細な障害を乗り切ることが困難になる場合があるようです。この歌は、困難に直面し目的を果たさず引き返された事実だけが述べられています。それだけに作者の心情を思うと、強く印象に残る歌です。

教へ子より貴重な新米届きたり漸く買へた半分を我に　赤間洋子

貴重な新米が届いたのは嬉しかったでしょうが、それ以上に教え子の方の心遣いが嬉しかったのではないかと思います。教え子の方と作者との親密な関係が感じられます。

日々坐る席に目に入るスカイツリー六三四メートルは高し　山﨑英子

作者はスカイツリーの見える所で暮らしているようです。毎日見ている光景はともすれば当たり前のように思いがちですが、この歌ではあらためて見るスカイツリーの高さを見事に表現しています。

濯ぎものとうに乾けるベランダにまだ出たくなし日の陰り待つ　森藤ふみ

猛暑に辟易としている様子がよく分かります。暑さで洗濯物は早く乾いて助かるのですが、それにも増して日射しの厳しさに閉口しているのでしょう。

五合庵前の根株に足取られ転べることも想ひ出とせん　天野克彦

佳作の並ぶ「良寛旧跡探訪」という題の連作の中の一首です。この歌には良寛を彷彿とさせるような飄々とした味わいが感じられます。筆者もこの地を訪れたことがありますが、心の洗われたような気分になった記憶が残っています。

だんべーの郷の方言消え失せる先祖の墓より見下ろす家並　嶋田正之

筆者の住む地域でも、かつて使われていた方言の「だんべ―」という言葉を耳にすることはほとんど無くなりました。この歌は歳月と共に変わってしまった世の中の姿が、この方言の消失によってよく表されていると思います。

水道のパッキン娘が取りかえているのを見ている夫とわれと　江波戸愛子☆

水道の漏水でもあったのでしょう。その原因をパッキンと判断し、交換する娘さんの姿をご夫婦で見ています。娘さんを頼もしく思っているのでしょう。

散歩する男が杖を腰に当て窓の下ゆくいつものかたち　姉川素枝子

作者は部屋の中から下を通る男性の姿を見下ろして、その様子を覚えてしまったようです。この男性との距離の遠さを感じるのは、作者のお体が不自由なことが背景にあるからでしょう。

この世には見られぬ花も造花にて華やかに売る百円ショップ　井上菅子

百円ショップは買い物をしたいという欲望を手軽に満足させてくれる、あるいは夢のような店かも知れません。そこに売られている花が造花であるというのに現実を感じます。百円ショップの有り様がよく捉えられていると思います。

十一月号作品一評

小林　芳枝

新調の提灯下げて盆迎え菩提寺に来て
灯と帰る　　正田フミヱ☆

盂蘭盆にはお墓で火を灯して自宅に持ち帰るという風習がある。その灯でご先祖を墓から自宅まで道案内するのだという。「灯と帰る」が何とも温かい。

風の吹くベンチに座り法師蝉のかすかなる声きいている　　高橋燿子☆

静かで穏やかな一首だがご主人が緊急手術をされた後のようなので心中は様々な思いで一杯ではないかと思われる。爽やかな風と法師蝉の声に少しでも癒されてほしい。結句の「きいている」は五音になっているが読み終わった後の心に残る響きがある。

新聞のおくやみ欄に思いがけなし豊田伸一さん温顔浮ぶ　　飯嶋久子☆

歌会でご一緒されていたのだろう。豊田伸一氏は長く病と闘い八月四日にご逝去された。八十五歳だった。冬雷では十一月号に載っているが地元の新聞には直ぐに載ったようだ。お会いしたことのない私にも伝わる穏やかな歌を作る方だった。ご冥福をお祈りしたい。

孫らきて姉妹で作る得意料理チャンプルにジャーマンポテト　　岩渕綾子

祖母の家に来て其々の得意料理を作る仲良し姉妹の声が聞こえるようだ。カタカナ語が如何にも若者らしいし、そんな二人を楽しそうに見ている作者の顔も浮かんでくる。

風に乗り行く蝶速しこの熱き九月の庭を繰返し飛ぶ　　林　美智子☆

九月になっても続いた暑さに加えて体調を崩された歌もある。家の中から元気に飛んでいる蝶の姿をみながら励まされているような気持がみえる。

朝七時娘たちよりライン来る元気マークに今日も始まる　　永光徳子☆

毎朝決まった時間にラインが来るのは安否確認だけではない嬉しさもあるような気がする。文字を打つ手間のいらない元気マークというのもいいし、さあ今日も元気で、というスイッチが入る。

注文のケーキと珈琲はこばるる程よき位置に止まるロボット　　大塚照美

卓上のタブレットで注文した料理を配膳ロボットが運んでくるというシステムが増えてきた。自分のテーブルにきちんと止まったロボットに感心しながらケーキと珈琲を卓上に置く。私などはロボットが幼子のように見えてまだ落ち着かない。三句「運ばるる」は「運びきて」が合うようだ。

玄関の外の温度計三十五度公園の子ら元気に走る　　吉村昌子

窓から見えるのだろう。暑さを感じさせない子供達の活発な姿に思わず気温を確かめてしまう。

台風が一つ二つと現れて進路予想図細かく確かむ　　吉田佐好子☆

何か楽しい計画があるのだろう。その日に掛からなければいいのに、と願う気持が結句に集約されている。今年は四つの台風が並んだこともあり多くの方が同じような思いをしたことだろう。

十一月号作品一評

藤田　夏見

流れ出る汗を拭きつつ負ひ来たる真桑瓜ごろり縁にころがす　　田端五百子

真夏の畑に挽いだ何個かの真桑瓜を、縁に移された時のゴロリのずっしりとした音と、畑から帰る時の吹き出る汗「ああ暑かった」の声が聞こえ真桑瓜を冷やす笑顔までが見える歌です。

盆迎えの提灯の傷み烈しくてわれらの代に新調を思う　　正田フミヱ☆

先祖が大切に使ってきた提灯なのだろう。痛みがだんだんと酷くなったようで新調を考えられている。「われらの代に」に先祖への尊敬と次の世代への希望を感じます。

風鈴は天明鋳物千余年の音色響かす和音となりて　　斉藤トミ子☆

風鈴の響きに千余年の音色、和音を感じられ静かに佇む作者。この歌に千年前の平安時代を夢想する筆者です。

オリンピックの熱気もプラスされゐるか暑さ極まる日本列島　　倉浪ゆみ

真夏のパリ五輪を応援した人の熱気までこの列島の気温を上げたのだ。

ポッポッと当たれる粒は突然に豪雨となりて辺りも見えず　　長尾弘子☆

近年の夕立の降りようは通り雨などと悠長に構えておれない程の激しさ、ポッポッと降り始めたと思う間もなく辺りが見えないとは、安全な場所に移られたか。

見も知らぬ方より届く色紙絵に歌集『さみどり』の一首の繋がる　　村上美江

第一歌集『さみどり』を上梓された。歌集を読まれた見も知らぬ方はその中の一首の歌への共感から色紙絵を描いて届けられたのだろう。結句の「一首の繋がる」に作者の感慨。

何時見ても窓閉じたまま世の音を遮る静かな老人施設　　乾　義江☆

「世の音を遮る」と静かな世界観をこの窓の閉じられた老人施設に作者は感じられている。

雨の日の安らふ音につつまれて無となり憩ふこだはりすてて　戸部田とくえ

雨の日の家事なども捗らず、なんとなく落ち着いた心持ちで過ごされているのだ。「無となり憩ふ」に惹かれます。

朝七時娘たちよりライン来る元気マークに今日も始まる　　永光　徳子☆

ひとり居の作者の元に決まった時間にラインが届くのだろう。元気マークとは明るい絵文字だろうか。安全確認と朝の挨拶　一日を元気で晴れやかにとの娘達の思いがこもっているのだ。

百日草つぎつぎ咲くを仏にと朝一番につみて供える　　吉村昌子

パステルカラーやビビットな百日草は、植えると次の年にも零れ種は夏の日々を咲き継ぐ。作者の朝は仏前での感謝で始まり、仏花の明るさ美しさで気持の良い一日となるのでしょう。

台風が一つ二つと現れて進路予想図細かく確かむ　　吉田佐好子☆

近年の台風の進路は予報図でかなり正確に見ることが可能です。仕事や日常生活の予定を立てるために作者はこの夏も数日分の予想図に細かく計画を練られた。

作品一

大磯の城山公園巡りきて帰りは空腹蕎麦屋に寄らむ
販売機の画面の指示に選びゆく温かい蕎麦さらにその種類
店の外に食券を買ひ入りゆけば数分ののち蕎麦出来上がる
番号に呼ばれて受け取るかき揚げ蕎麦そろりと戻る席まで四歩
店奥の立ち食ひコーナーへ向かふ人　背広に大きな鞄を下げて
かき揚げをのせたる熱き蕎麦を食む揚げ具合よし汁(つゆ)の濃過ぎず
十三時半を過ぎてもひつきりなし人は入り来る駅の蕎麦屋に
テーブルの下の荷物は夫へのみやげ小田原農園みかん

桜井　美保子　神奈川

水しぶき上げつつタンクにサンマはね朝の市場は活気づきをり
高架橋怯える犬を抱きやれば青き瞳が夕茜写す
影法師連れてランナーひた走る一本松視野に足音軽快
緑色杉玉美し初出荷ふゆ告げる味「雪っこ」旨し
処分決むる母の半てん引き寄せるシャボンの匂ひと母の残り香
あの味が来てサンダルで駆けいだす軍手の手から焼き芋受け取る

田端　五百子　岩手

欅の下埋めたるカプセル掘り起すブリキの缶より青春飛び出す

正田　フミヱ☆　栃木

らっきょうを開けたる穴に植え込みて覆土なす作業二メートルほど
明日はもう玉ネギの種まくと決め夏日続くが半日陰に置く
白菜にビニールマルチ試みる穴開けて植え培養土に覆う
ばっさりと剪定受けたキンモクセイ小さな枝に黄の花匂う
トマト苗を夏に植えれば晩秋の風に黄の花満開となる

飯塚　澄子　東京

谷中祭りバレーで曽孫出るといふ初めて臨む初音の森で
広大な広場に入りて驚きぬ谷中小近く日曜の人出
幼児から小学生ら四十余人バレー衣装で華やぐ舞台
面かぶり爆上戦隊ブンブンジャー男性美なす軽妙踊り
冬雷の63回大会の記録送られ感銘深し
詠草に感想書きて送る人一人得られて感慨なしぬ
冬雷の大会プリント送りくる先生方の作業胸打つ
書を習ふ仲間の姉の友の縁冬雷知りて今の幸あり

斉藤　トミ子☆　栃木

メラノーマの手術受けたる妹の歩調に合わせ三毳山歩く
踵部に穴を開けたる靴を履く術後半年の妹と歩く
香りくる金木犀を探し行くすじ雲浮かぶ青空のもと

ひと掃けのすじ雲見つつ歩きおり柚の実の色目立ち始める
血圧に一喜一憂しては駄目と看護師の孫励ましくるる
水を飲み塩分控え歩けよと孫言うことは何時もしている
水谷氏の訃報載りたる十月号嘗て我が歌褒められたりき

高　橋　燿　子☆　埼玉

「寒いよ」と姪が前日知らせ来る那須山の雪斑に見える
そばに寄り孫の写るケイタイを見せる甥も還暦迎えて
誕生の時より牛と共に生き病を抱えて模索の跡継ぎ
迷いつつ参加を決めて大会へ弾む心で電車乗り継ぐ
話し上手な歌友と別れの手を振る大会の余韻抱きて
十二歳違う弟に「明道さん」威厳ある声で姉はよびたり
八人が並ぶ豊園の記念写真米寿の姉の若さうらやむ

浜　田　はるみ☆　埼玉

盆踊りかき氷係は楽しくて活気ある時間(とき)思い出したり
何色のダリアにするかやっと決め主役の花を描き始めたる
大きなスケッチブック持ち歩くしんどさ次第に体にこたえぬ
今度は夫の介護と友が言い行かれるうちに旅に出ようと
ペンションもいつまでやれるか分からぬし互いの条件合ううち泊りぬ
小渕沢友のペンション五年振り旧友達と喋りに喋る
富士山に冠雪ないのは珍しい十月末の南アルプス

野　崎　礼　子☆　埼玉

冬雷の友との再会楽しみに十月二十二日カレンダーにまる
燿子さんゆみさんとの再会に時間を忘れ話が弾む
お互いに良くぞここまで続けたと過ぎし時間に拍手喝采
短歌への熱い思いがひしひしと我に無きもの二人は持ちおり
パンプスを惜しむことなく処分してスニーカーが並ぶシューズボックス
夫といてかみ合わぬ話も何のそのそうだ今日はケーキを焼こう
皮付きのおでん大根それも良し細かいことは言わぬと決める

辣韮(らつきょう)

樗　木　紀　子☆　東京

『主婦の友』の辣韮漬けの作り方見て四キロをしっかり漬ける
年ごとに鳥取砂丘の辣韮を四キロ求め六月に漬ける
辣韮漬け毎年近所にコーヒーの空瓶に入れ九月に配る
辣韮が今年は不作残念なり近所の人らに配れずにおり

岩　渕　綾　子　岩手

大会の高橋氏より動画来ぬ不参加の吾を気遣ひくれぬ
先生の大会挨拶の写真ありわれもその場に参加せるごと（大山敏夫先生）
パネラーの楽しき様もありありと冬雷会員はみな優しかり
高橋氏の写真もありて嬉しかり震災前より支援受けたり
老いしわれ数多の人の支へあり独り暮らしも三十年余
突然にスマホに無視されパニックに蹇の吾を助くる人あり

わが願ひ気軽に受けてドコモにと耳悪しき吾の通訳までも
新しきスマホに変へてとまどひにぬ惚け防止かね続けて行かな

田　中　祐　子☆　埼玉

蜂の巣が在ると出入りの若者が目をまんまるく西の屋根指す
休日の市役所なれど当直の電話の対応は懇切なりて
三つほど脚長蜂の巣を払いもう大丈夫との業者に安堵
駆除済みて静まる庭へ子の車ゆるり入り来嫁御同乗
ありがとうと呟きすうっと逝きたると夫君を看取りし友の声届く
友自身の放射線治療の通院も重なり夫君の介護険しき
わたしにはとてもとてもの人となり幼日の友は小柄に剛気

倉　浪　ゆ　み　埼玉

日本酒と小さき菊を供へます十月十八日祖父の命日
冬雷の友と語らうひと時は得る事おほく楽しかりけり
中国語ともに学びし年上の友退会す淋しくなりぬ
孫たちの面おもひつつ用意する厨に漂ふ赤飯のかをり
風にのり木犀の香流れくる間近にせまる川越祭りは
やぶ枯らしの生命力には負けましたゴメンと言ひつつ除草剤まく
この土手路穂すすきそよぎ赤トンボ数多とびかひ秋はたけなは

林　　美智子☆　東京

入院後十日余りで兄逝きぬ父亡き後の戦後を背負い

介護せし妻に先立たれ三年をさびしさびしと笑顔の兄は
家事全てひとりで熟しし兄の家最後まできちんと片付きており
電話にて夕方五時に毎日の兄の出来事聞く習い絶ゆ
手を摩りありがとうの他言葉出ず　八十九歳の兄は逝きたり
水澄みてハナミズキの実赤々とただしみじみと秋は来にけり

飯　嶋　久　子☆　茨城

ひとまわり歳の離れた妹を母親代りに長女は守る
時を得て金木犀の花盛り香りに包まれ娘は帰宅
高齢の母親なれど幸いにまだまだ娘を世話する倖せ

矢　野　　操☆　香川

辞書により世俗を超えた美しさきらった名前〝みさお〟を好きに
八十すぎ食べやすい品ヨーグルト大根おろしおかゆあきない
とうふの日十月二日のみならず日々わたしにはとうふの日です

吉　田　佐好子☆　茨城

この夏の暑さに向かいフル活動ついにエアコン寿命を迎えぬ
秋半ばエアコン切り替え暖房に途端に警告ランプが点滅
二十年朝から晩まで夏と冬壊れたところは上がらないフラップ
世の中を不安にさせる犯罪のニュースで防犯対策を練る
田舎道外灯少ない夜道にはタヌキがひょっこり視線合わせる
しましまの尻尾ポッコリ猫と違い道の途中で立ち止まるタヌキ

街路樹の上のほうから紅葉す例年よりは速度ゆっくり
道先の筑波山にも紅葉が夏の緑がくすみを帯びる

松　中　賀　代☆　高知

口ずさむ秋の七草ふじ袴この花に寄る蝶々を待つ
山栗を子供の頃に風の後拾った楽しみ思い出したり
亡父の声今朝は山栗落ちてるぞ袋かたてに走って行った
朝早く夜露に濡れた落ち葉のけ丸っこい栗を選び拾った
野鼠の隠しておいた栗の実を小学生の私がたべた
星空に月の明かりと外灯の明かりを頼り戸締まりをせむ
アドレスを続けて消すは忍なく赤いカンナに貴女を想う

鈴　木　やよい　東京

試しにと畑に植ゑたる山芋はマグロ多めの山かけとなる
自転車の女子高生らが賑やかに走り過ぎたり笑ひ声残して
ここにもかカボチャのお化けを着せられて犬は無邪気に吾に寄り来る
エッジ立てジャンプを踏み切るその瞬間われも息詰むテレビの前で
パチンコ店の広き跡地はそのままに荒草だけが旺盛に伸ぶ
踏切を渡る途中に目を向けるレール交はる遥かな先に
冷蔵庫に数粒残り忘れたるシャインマスカット甘し皺あれど
筋肉に汗光らせる女性の背を眩しく見やるジムの広告に

本　郷　歌　子☆　栃木

艶やかな濃き緑の葉陰より青き小さき蜜柑が覗く
植えて五年初めて生った十五個の蜜柑待ち遠し冬よ早よ来い
青い網に家は周りを囲まれて二十年目のリフォーム始まる
庭隅に高砂百合の花開く霜月に入り十日を過ぎて
ブツブツと自分と会話する我よ思う存分カラオケしよう
昔取った杵柄ならず中国語初歩の挨拶の言葉につまる
周りには網と足場があるばかり窓から見えず菊の咲く庭
朝日まで青き光を放ちおり海底暮らしよいつまで続く

村　上　美　江　岩手

不自由な片目を友は頼りにし去年より大き字米袋の上
新米の輝き見れば命なりまして友より届けられれば
旅すれば岩手の米のおいしさが初めてわかる日々の贅沢
十三年この長き日々あれからの痛みの消えてそんな気がして
ネーム見てその人の歌うかび来るにこやかな中の歌の面影
軽井沢冬のコートの出番なり「千住博」の滝の水浴ぶ
秋空にまぶしい列車「赤と黒」千曲川越え北斎館まで
新幹線スピード上げればみぎひだり肩触れ合ふも娘となら嬉し

伊　澤　直　子☆　東京

「トロールの森」と称して公園のあちらこちらにアートの展示
作品は「風のにおい」のテーマにて小学生から美大生まで

久びさに従姉妹四人が集まりぬ八十歳より九十歳まで
日本橋丸善カフェで早矢仕ライスみな「ごはん半分で」と注文する
食べ方に蒸し栗がよいと書いてある甘味は濃くて食感ホクホク
やっと来た一と月遅れの秋晴れは木枯し一号を伴いて晩秋
鉢植えで買いたる小菊地植えして増えいる秋の庭は華やぐ

乾　義　江☆　茨城

曼珠沙華は墓場の花と教えられき所変われば庭先にも咲く
四つ角の隅に鎮座の馬頭観音縦横に走る車を見ている
供花されて奇特なる人に支えられ馬頭観音は守られている
痛ましや打開出来ない横田さん見掛ける度に年を召さるる
日暮れ時ねぐらに帰るひとときか電線に鳴く椋鳥八羽
衆議院期日前投票所に人多し我も立ち寄り投票済ます
滋賀名産の鮒寿司届く癖のあれど病み付きになる孫呵呵大笑
この所降りみ降らずみの滅入る日々ワールドシリーズ心の和む

永　光　徳　子☆　東京

朝焼けにカラスの群は弧を描き今朝は鳴かずに羽音を残す
耐え難き猛暑の夏も過ぎ去れば秋雨の中懐かしさ湧く
南天の実の色付きて久々にスズメ飛び交いメジロ囀る
陽だまりに球根植える草花の寄せ植えをする今日は娘と
道端の野菜スタンドの片隅にフジバカマ置かれ「ご自由にどうぞ」

指を折り秋の七草思い出す解らぬ一種は図鑑を開く
漸くにクズと解りて驚きぬ荒地を覆う蔓草なりき

稲　津　孝　子　福岡

刮げたる紫蘇の実入るる袋より天道蟲の出でてきて這ふ
まだ暑き十月の庭黄の蝶が来たりて低く飛ぶ力なく
服の背のファスナーに手の届かずに悪戦苦闘してゐる独り
暇のできれば我に習ひて弾きたしと夫の言ひにし事あるピアノ
電話にて娘と話すさういへば近ごろかやうに笑ふ事なし
食器棚ガタガタすといふ震度三と娘は言へり電話の向かうで
強き風に吹かれてきたる斑猫が飛びてゆきたり御礼を言ひて
日の入りの早く夕べは暗くなり無性に寂しくなりくる霜月

戸部田　とくえ　福岡

川の瀬に佇む白鷺みるほどに清められをりその立ち姿
由布院の今を盛りの彼岸花子らと巡りぬ染みるくれなゐ
帰省せる子のけふ京都に戻りゆく雨降り出せば増せる寂しさ
ききなれぬ小鳥のこゑの庭にして嬉しく見回す一目と願ひ
数珠玉を庭に絶やさずお手玉を作り楽しむ涼やかな音と
土砂降りとなりたる庭の二条城砂利ふみしめて染みこむ天水
廬山寺の今を盛りの桔梗まなこに染みる心にもまた
堀文子「群れない慣れない頼らない」心情かみしむ一人旅の宿

大塚照美　兵庫

新築の祝ひに贈りし「幸福の木」株の殖ゆとふ友の窓辺に
夕空にのぼる半月その下に羽ばたく二羽は墨絵のいろに
十箇月入院されて久びさにま向かふ主治医の髪はま白に
朝採りのいちじくの値に迷へども有難きかな旬を食ぶるは
幼きを負ひて荷台に園児のする自転車の母親しばし見送る
通院のわがため娘は徳島より「運転手です。お任せあれ」と
懸案の永代供養を如何にせむわが庭に咲く彼岸花のまへ
海遊館に見しジンベエザメは海に去るも新しき雄姿みたし水槽に

吉村昌子　千葉

娘来て元気かといひ掃除して布団を干して帰りて行けり
このところ長生きするのもしんどいと思ひて庭のコスモスに言ふ
風強き今日の電線揺れにゆれむく鳥バランスとりかねてをり
松山のお墓参りに行かうよと息子夫婦に誘はれてをり
一泊の予定の松山墓参り香川の弟にも会ひたいなあ
夫言ふ女子のマラソンのどの子にも「子」がつく名前この頃無いね
小雨降る今日は鴉達常よりも早く西へと帰りて行きぬ
明日のあらなむ

松本英夫　東京

百日目順徳院覚えつつ通勤電車は大阪平野へ
主催者の「皆みな老いた」の嘆息に歌会救ふ言葉を知らず

楽しかる歌会こつ然消え失せぬ師よ友たちよまた会へる日を
苦吟すればニコライ堂の技さえて大小おりなす鐘の音思はる
いくたびも声出して読み歌を聴く肚に響くか確かめながら
茶気おほき子規と二人で笑ひをり諧謔磊落竹乃里歌
透きとほる青空仰ぎ大会へ歌人たちの笑顔思ひつつ
今年また無事をたしかめ交歓す明日のあらなむ冬雷短歌大会

三好規子　神奈川

早朝の桜の木より雀あまた八面に飛び散る秋空の下
スケート部の女孫は京都の鴨川の河原にて常トレーニングするとふ
京大のフィギュアースケート部はリンク無き京都より大阪に週一通ふとふ
空き地にある枝垂れ桜が葛の葉に覆はる誰そ除けてくれぬか
朝あさを道三百メートルの落ち葉掃く初老の男に頭の下がる
道を掃く人を労へば「きれいだと気分も良いし趣味です」と笑ふ
スーパームーンの十六夜の月が中空に残り輝く夜の明くる前

須藤紀子　東京

亡き母の育てし月下美人枯れ果てて冬雷表紙に香の蘇る
我もまた育ててみたし月下美人されど寂しさ深みゆくやも
アサギマダラ来るかと植ゑし藤袴に豹紋蝶と蜜蜂の群れ
石蕗の茎に擬態し蟷螂は花に寄り来る羽虫待ちをり
暮れ方になりてやうやく日は差せどもう間に合はない今日の蜜蜂

気配消し近づく人を感知して機械は素早く表示を変へる
山燃ゆるごとくに湯気を巻き上げて珈琲淹れる霜月二日

佐藤　靖子　東京

公孫樹のみち黄の蝶たゆたふその行方見つづけてゐて見えなくなりぬ
いづこより香りくるのか探すとふ秋のならひにいままたならふ
みつけたるくるみ握力使ふとす老人用と思ひをりしを
駄目男演じゐるひとこのまへは好男子ゆゑ重ねつつ見る
韓国の王宮ものの俳優のどの歯も白くかたちととのふ
何気なく猫に気づけば稀有なことわれを横目に眺めてゐたり
八王子駅のベンチに坐りゐし楳図かずおが立ちくれにけり（悼　楳図かずお）

齋　鹿　ミヤコ　神奈川

枝白く枯れたるレモンの根の近く芽吹くみどりの塊りのあり
諦めてをりたる鉢のレモンの木めを出すちから持ち続けたり
デパートの四階五階六階が電気店となる垂れ幕さげて
デパートのリニューアル記念の饅頭に並ぶひとの列かどを曲がりぬ
スーパーのパックに痩せたる秋刀魚かなこの数年は秋刀魚を焼かず
その度に買ひたる店のチョコレート百円の値上げここも同じく
汚れ拭き油吸ひ取る木綿のきれ小さく切りぬ古Tシャツを

江藤　ひさ子　大分

唐突に作品一への投稿の通知を受けて戸惑ふしばし

概ねは独学なりしわが作歌採否を糧に励む月々
軽々と脚立動かし槇・椿・山茶花・木蓮切り行く庭師
切り落としたる枝葉集めて軽トラックに積みゆく作業それのスピード
作業終へ暫し寛ぐティータイム庭師の笑顔いとも爽快
半切の掛け軸・折り帖・木彫りの書・写経も出品す校区の文化祭
陳列の過去のわが書にしばし立ち旧友と対面の如こころ和みつ

鈴木　計子　東京

あああれがドクターイエローだつたのか夜中に音して窓に見たるは
ドクターイエロー見たる新幹線下にて次男は車の事故に遭ひにき
もみぢせぬうちに灼け枯れ残る葉も少なくなれる今年の桜
ふる里の新米のつやに卵かけ食べぬいつものパンやめ今朝は
自転車を片寄せゆづる狭きみち会釈に通る人ゐて和めり
混みあへる駅構内に響き来ぬ声を限りの幼の泣きごゑ
休日の車内に立つ人坐るひと老いも若きもスニーカー履けり

中島　千加子　東京

単線のローカル電車とほり過ぎ昼顔あはく紅く連なる
けふもまた電車を逃してしまひたり月は小舟のやうに浮かびぬ
秋の陽の温もり風のひややかさストールとりて味はふベンチ
鳥さかな亀がすくなくなつてゐる湖面穏やか銀杏葉のせて
枯れて散る木のしたひろく水仙の芽が伸びそむる優しきみどり

枯色の草の広がる公園に咲き遅れたる小き白百合
通勤の歩みの緩む山茶花の垣根に莟こんなに増えて
山本三男☆　群馬

腰痛は屈めるまでに改善しできる範囲で庭仕事する
早朝の散歩帰りの家近くあたりはすっかり明るくなりぬ
念のため迷子札付け散歩する事故や病気のことなど思い
病院の窓より見ゆるサルスベリ花は終わりて実の付きており
川沿いを歩めば流れの音絶えず時折りカラスの啼き声を聞く
土手歩む十一月五日川中にこの秋初めて鴨の群れ見る
運転は二時間程なら障りなく妻と大間々の菊を観に行く
わがことを割合い元気とひとに言う妻の電話をかたわらで聞く
特別展「多賀城1300年」　中村哲也　宮城

霜月にコートも要らぬ暖かさ降り立つ駅に青空を見る
東北に平城長岡平安の出土の品の一堂会す
字の上に重ねて記す木簡に文字習得の苦労を偲ぶ
解説に図録にも無き木簡に削れる樹木の材質は何
平城京出土とありたる陶枕のいにしへ人の寝心地いかに
平安宮豊楽殿跡出土とふ瓦の緑釉千年残る
初に見る京の近郊産といふ薄手の素地の緑釉陶器
「光る君へ」大河ドラマの天皇の権威を思ふ白磁の碗に

十一月集／残響集評

大山　敏夫

あきづ来よななほしてんたう現れよおほたうらうも畑に集合　小林貞子

畑仕事の様子が抒情性豊かに作られた一連で読後にほんわか感がある。「あきづ」はトンボの平安以前の古称で、「七星瓢虫」「大蟷螂」をそれぞれ旧仮名表記で「ななほしてんたう・おほたうらう」として楽しんでいるのが効果的。

プリテオグリカン・さめ軟骨・コンドロイチン・グルコサミンどれか効かむ　東ミチ

高齢になると躰にも不具合が様々に生じる。その対策に種々のサプリメントを服用する事になる。この歌はさういう多数のサプリ類の羅列が作者の置かれた状況を物語り溜め息いっぱいである。お大事に願います。

山畑の草刈る夫のうしろ舞ふハグロトンボがひらひら四つ　佐藤幸子

夫婦での畑仕事が楽しい睦まじさで、特に結句、夫とトンボの踊りあうがに展開されて微笑ましい。

全力で回るスタンド式扇風機故障なく親し五十年となる　児玉孝子☆

物を大切にする作者にとって、この扇風機も苦楽を共にした戦友なのだ。初句の「全力」は自身の生き様を反映し、具体的数詞の「五十年」が感慨深く響く。

サンタさんほしいおもちやがなぜわかる五歳の息子の面持ちなつかし　松本英夫

子育て時代は大変だがかけがえの無い喜びも残る。可愛かったこの子も今は立派な父親なのだろう。筆者も小学二年の娘がサンタを信じ切っていて、サンタってイトーヨーカドーで買ってくるんだねって話していたのには参ったものだ。

八箇月ぶりバスに乗り銀行へ解約に行く付き添ひなしに　三好規子

体調も良かったのか。初句からして結句の状況はかなりの勇気が要ったことだろう。ある種の達成感が伝わる。

漸くに七月初旬聞こえくる励ますやうな蟬の初鳴き　吉岡松世

この「励ますやうな」には、作者の気持が籠っている。生き物はみな助け合って励まし合い生きて行きたい。

会場に流るる君が代胸深し努力の二文字理して尊し　髙藤朱美☆

注意して聴いていると他国の国歌には「やっつけろ。撃ち倒せ」とか戦いを歌うのも多いが、我が国歌は静かで格調も祝歌の志高く作られていて良いと思う。作者の胸に深く沁みたのも納得である。

炎天下道路を渡る青大将車を停めて無事を見守る　羽田孝輝

息できず意識朦朧眼も見えずオホスズメバチの毒が巡りぬ　同

のどかな里山か農道のような所で蛇を見守る作者の姿がこの上なく優しい。一転大変な大蜂に刺された驚きが、二首目には具体性濃く作られている。

持ち歩く木陰といわれる日傘さし裏地に触れれば熱さ感じる　片桐美穂子☆

日傘の裏地に熱を吸収し木陰の涼しさを保つのを触って確認した作者の驚き。

一月集

本　間　志津子　山形

海抜は一、七と表示あり河口に近きわが家のめぐり
ここよりは河口も海も一跨ぎホテルリッチの十階に立つ
買物の行きには淡き半月の帰りは黄に濃し晩秋の空
秋の宵空に広ごる花火あり水害復興記念とぞ聞く
スーパーの西日の強き側溝に月見草咲く秋はたけなは
濃き霧に白鳥の声遠く聞く異界を徨ふごときか今朝は
白き雲水面に映し街川は動くともなくゆるくたゆたふ
晴れわたる鳥海山と月山に初冠雪あり十月なかば

石　渡　静　夫　茨城

穐田の輝く緑に目をやれば一直線に鵙の声来る
くよくよとする日もあるし沈む日も顔を上げよと小鳥の声が
大会に遅れて参加の会場に空席さがす不安の中に
講評中に三人掛けの中の席着座をすれば左に嶋田氏
言ひ過ぎる歌の多いと稲田氏は忠告くれる後ろの席で
桜井氏を中心にして和やかに会話が続く我らのテーブル

助詞副詞大事にせよと大山氏推敲足りぬと恥入るばかり
もし生まれ変れるならば鳥になり南の空へ翔んでみたくも

小　林　貞　子　山形

この秋の熊の出没聞かぬ間に冬を孕んで山風の吹く
黒き毛を銀の光に輝かせ熊は見るやもスーパームーン
三十五万八千キロに寄る月の冴え冴えと射す白銀の影
手の平を弾く硬さに巻きしまり白菜畑の緑豊けし
蒸しあげて短冊切りの「紅はるか」秋日に干せば甘味の深む
冬立ちて初冠雪の飯豊嶺の真白き山頂雲を従ふ
霜の夜は寒冷紗掛け守りたる紫もつての菊を今日摘む
だれかれの幼き頃の笑ひ顔愛しく浮かぶ真夜の目覚めに
湯湯婆の温みに眠り深くして寝返りの夫寝息安けし

佐　藤　幸　子　山形

この種が大根になり蕪になる思へば不思議ＤＮＡといふもの
霧の中水音かろき田圃道緑のひこばえが苅田を覆ふ
娘が来ると聞きて一株里芋の大きな所を掘り上げてみる
今年米里芋大根一本葱自づと決まる今宵の賄ひ
娘婿が手塩にかけたシャインマスカット食めば口中にサクリ崩れる
大盛りチャーハンに重ねて爆盛りする映像鬱陶しくてチャンネル替へる
執念で亀虫一匹退治してこころ安らか大の字に寝る

柿の葉がはらり音なく落ちる朝雀も百舌鳥も鳴き声高き
朝の空に煙ひとすぢ燻らせて薪ストーブに火を入れる夫

山本述子　神奈川

「馬車道」に白黒二頭の馬の引く馬車に客乗せ往時を凌ぐ
真つ赤なる秋バラ潮風受けて咲く気高く香る山下公園に
青い海に鴎百羽ほど揺られをり時折潜り餌探しをり
空澄みて銀杏並木のすがすがし黄金色待つ黄緑の葉の
黄葉多き枯葉に埋まり幼児らは得意顔して満面の笑み
冷える夜の足腰辛し暖かき湯に解されてほつとするなり

川上美智子☆　高知

「秋晴れの爽やかな日になります」と声の清しき気象予報士
川沿いの桜並木はすっきりとその葉を落とし風吹き抜ける
葉を落とす桜並木の上空にいわし雲浮き秋は確かに
古里の祭りの一つ消ゆる日の棚田を照らす最後の「灯り」
伝統の祭りぽつぽつ消えてゆきいつか集落消滅の危機
農道を小犬のように駆けて来るハクビシン一匹坂の下より
驚かす積り無けれど立ち止まり逃げの構えをするハクビシン
ハクビシンのかっと開いた鋭き眼に一歩隔てて睨まれており

益坂順子　福岡

我が町は雨降る夜に埼玉の友より届くスーパームーン

誘はれて見物に行く「のばらさん」節頭奉行の汗の滴る
声高に奉行かなづる「祝ひ歌」気合ひ入りたる白粉の顔
雑用の日々の暮しに連休を選びて行けり九重黒岳
連休の登山口には車列あり九州のみにあらず兵庫も
苔のむす岩と倒木こもれ日を受けて輝く樹林の中に
倒木に色も形もとりどりの茸立ちをり意思もつごとく
紅葉を求めて登る黒岳の厳しく思ふ齢重ねて
急登の岩場続きて紅葉を楽しむゆとり失せてをりたり

藤田英輔☆　高知

今日はケアカンファレンスと面会日母発熱し面会消失
在りし日の父はソフトクリーム両手に持ち笑う金木犀の香につつまれて
走る夢を見ているらしくソファーにて昼寝する犬十五となりぬ
ベランダに児は抱かれて待ち侘びる月現れて母の帰るを
先ず口に水を含みて飲む吾と児はそのままで飲む粉薬
甘とうをもぎ採りながら唐突に吾が若き日の失態戻る
炎天のハウスで二本飲みし水この頃一本だけで余りぬ
甘とうは高き枝にて赤色し収穫仕舞いの近きを示す

藤田夏見☆　広島

一本の零れ種よりスプレー菊咲き盛りたり臙脂の色の
咲き始むる菊抱えゆく兄の墓立冬の日の空澄みている

山路越え隣の町の墓詣で里なる家は敷居の高く
同胞のこの山裾に眠りおる小菊を供え水を供える
流れ出る一杯の水まず飲みて墓に供える眠れる兄に
夢に来て六個の宝埋めしとう兄の言葉を時々思う
あかねさす日に照らされて干し柿の簾のごとくわが軒にあり
鰆鰤イカと秋刀魚と鮭鰹買いてしまいぬ目が欲しがりて
味噌漬けと砂糖醤油の竜田揚げ塩こうじ漬けと魚それぞれ

吉　岡　松　世　愛知

口開けて赤い火を噴く恐竜のクレヨンの絵から力溢れて
小六の真愛の背丈は伸びてきて空に咲きゐる皇帝ダリア
晩秋の日溜りに咲く帰り花いのちのふしぎ見つけたやうな
田舎から「どうしてゐるか」と宅急便新米十キロ送られてくる

小　嶋　知　葉☆　茨城

ひさしぶりに結婚式に出席し吸いこまれゆく白無垢姿
みつめあいほほえみあいて二人が同時に発す「やさしいんです」
引出物は小さな俵にお米あり「新米夫婦ですよろしく」と
還暦の数え子たちの同窓会四十五年の歳月流れて
「稜線を生きよ」のことば好きでしたと語る教え子にすくむ思いす
忘られぬ思い出ですと語りくる左千夫の生家訪ねしことを
今年また二鉢の菊届きたり白と黄色の大輪咲かせて

残響集

ロンドン・パリ

塚　本　節　子☆　茨城

テムズ川クルーズ船から眺めおるロンドンブリッジ空に映えたり
王族の埋葬されしウェストミンスター寺院は天井までもステンドグラス
ロイヤルアルバートホールのクラシック演奏会は立ち見席まで満席なり
ロンドンからパリへと向かう二時間半ユーロスターの乗り心地良し
パリ駅からバスにて五時間世界遺産のモンサンミシェルは夕日をうけて
「モナリザの微笑み」前の人だかりルーヴル美術館にマスクの人無し
五輪のロゴ凱旋門の中央に赤・青・緑の青空に映ゆ

井　出　裕　子　静岡

兄嫁と京都の旅を計画す目指すは一緒天の橋立
兄嫁と姉妹になりて四十五年心浮き立つ初の二人旅
兄嫁は展望台より股のぞき天に舞ふ龍を見がほしと言ふ
亡き母の天の橋立訪ひしを知り我も行きたしと長く思ひぬき
亡き母の旅のみやげの守り札リュックに付けてちからもらひぬ
三・六キロの松並木歩きたる後に蕎麦と日本酒で昼餉をとりぬ
美容師の客を褒むるは仕事と知れど今日もはまりぬ甘きトラップに

車椅子で美容院に来たる老婦人毎月通ふを欠かさぬと言ふ
片　桐　美穂子☆　神奈川

神奈川に青き歓喜が広がりぬベイスターズが日本一獲り
圧倒的不利の予想をくつがえす控えの選手らの底力
最終戦大差で優勝近づくもその瞬間まで息詰め見つめる
選手らの抱擁三浦監督の涙にテレビの画面がにじむ
編み針と毛糸をもてば少しだけ冬の時間がゆっくり過ぎる
編み物は心の思いを結晶化できる手仕事時間にのせて
初めての楽器に挑戦する父は動画を見ながら歌い奏でる
Fコード抑えられずにあきらめたギターは今もあこがれのまま
弾き語りしたくて我も練習す初めに弾いた歌は「ふるさと」
越　澤　太　朗☆　茨城

紅はるかの感触手探りで確かめて引き抜く蔓に土の香漂う
収穫を終えたる畑に天日干しの芋ゴロゴロと寝転んでおり
紅あずまはホクホク系のさつま芋年寄り向きと頬を緩める
遅蒔きのほうれん草は芽出し後にトンネル栽培の準備始める
大根の種を探して冬に育つ「三太郎」を買いに走りぬ
のらぼう菜隣りの地主に譲り受け生育順調緑広がる
鍋物に需要が増える冬迎え春菊種蒔きハウス栽培
蕎麦刈りを終えたる畑は何も無く春になるまで休耕とする

（☆印は新仮名遣い希望者です）

『形容詞・形容動詞の短歌コレクション1000』紹介

桜井美保子

形容詞、形容動詞というと日常話す時でもちょっとした文章を書く時でも、また歌を作る時でも自然に使っている。その品詞について深く考えることもなく過ごしてきたので、この本を手にして驚いた。ページを開いた途端、目に入ってきたのは日本短歌総研主幹の依田仁美氏の言葉だ。「歌人がいちばん言いたいところに具体的にフォーカスするときに頼るのがこの二つの品詞」であるという。そしてそれは一首中の「花」と言うべき役割を担っていると。さらに本書ではこの二つの品詞を活かした古今の秀歌（スタンダード）と意欲作（言ってみればアドベンチャー）と双方の歌を紹介しているというのだ。形容詞と形容動詞の真の魅力を伝えるべく、豊富な実作例を集めた作品集である。これらの品詞が歌の中で、どのように自在に効果的に使われているのか、なるほどと心に残った歌を項目別に少しずつ取り上げてみたい。冬雷からは、大山敏夫氏の三首が掲載されているので、それも一緒に紹介したいと思う。

◇色彩

「輝」

つちふまずに朝の光あたりたり歩かない
足つややかにして　　江戸　雪

連用形。伏せっている人の足。歩くことはできないがその皮膚が示す生命力。

樹齢わが子ほどと思ひ仰ぐともその幹ふ
とく花はらんらん　　大山敏夫

「らんらん」は語幹。強い響きがある。花の力を思わせる。若いながらも堂々の幹。

◇状態

「遠隔」

大江山いく野の道の遠ければまだふみも
見ず天の橋立　　小式部内侍

已然形に確定条件の助詞「ば」で「遠いので」という意味。そこから展開する下句で「文」と「踏み」を掛けているのも鮮やかなテクニック。

雲ふたつ合はむとしてはまた遠く分かれ
て消えぬ春の青ぞら　　若山牧水

連用形。ふたつの雲は人を表しているようにも思える。出合う寸前に又遠く離れていく。空の青さが一層、目に沁みる。

「軽重」

ほろほろとほどけて下山の膝軽し釣舟草
の朱をゆらして　　古谷智子

終止形「軽し」が爽やかに響く。下山するときは心も体も変化している。その身体感覚をうまく捉えている。

やや重いカバンを提げて一頭のラクダの
ように今ここにいる　　坪内稔典

連体形。資料などがぎっしり入った仕事のカバン。厳しい自然環境で荷を運ぶラクダのように、実直に生きる自分がいる。

「不確」

図書室に冷水機にぶくひかりをり　かが
みこむ人を獣に変へて　　川野芽生

連用形。日常の時間でありながら不思議な空間を描いた。「にぶく」が思いがけない結句を引き出している。人も獣も水を欲する時の姿は基本的に同じかも。

◇性質

「長短」

ながからむ心もしらず黒髪のみだれて今朝はものをこそ思へ　待賢門院堀河

未然形。ともに一夜を過ごした男からの後朝の歌の返歌。末長く変わらぬ愛を誓ってくれてもそれは信じていいのか。

夜のプールをすすむクロール、男には一生はつね短かかるべし　佐佐木幸綱

連体形。ひたすら働いてその疲れを癒すように夜のプールで泳ぐ。自らの一生はいつまでと思う。「短かかる」に深い詠嘆。

「新」

くずれまたもりあがりくずれ幾重波あたらしき波億兆の波　加藤克巳

連体形。波の動きを凝視する。次々と打ち寄せる波は力強い。そしてそのひとつひとつが新しい。

風だ四月のいい光線だ新鮮な林檎だ旅だ信濃だ　北原白秋

連体形。詩のような言葉が続く。だが初句から引き込まれる。つやつやとした林檎が目に浮かぶ。信濃の春なのだ。

「爽」

死に化粧に横たふ丈母のたましひの抜けししむらすがすがとあり　萩岡良博

連用形。生きる苦しみや辛さから解放された母。死を持って安らぎを得た。この世から旅立った母への愛と鎮魂。

つつがなく一日終へたるよろこびにわが身いたはり飲む紫蘇ジュース　喜多昭夫

連用形。ともかくも無事に一日を過ごすことが何よりの幸である。自分自身を労わろう。明日の健康を願って。

颯爽と死ぬべく思い定めたりさようわたくしは颯爽と死ぬ　依田仁美

「颯爽と」が繰り返し使われている。いずれも連用形。一人の人間がどのような死を迎えるかはわからないが、こうありたいという強い願い。こう思えば死は怖くない。

「難易」

介護制度とたやすく言ふな一夏を母受けくるる施設探して　野地安伯

連用形。あれやこれやと老いた母のために居心地のいい施設を探すのは大変。介護制度があるからと安心は出来ない。

青森で不良になるのはむずかしい電車の吊り輪もりんごのかたち　くどうれいん

終止形。電車の中も林檎の形の吊り輪があるし、環境が優しいから不良にはなれない。だからまっすぐな心で生きよう。

たはやすく復興といふ遠つ沖に数へられざる死者な忘れそ　本田一弘

連用形。東日本大震災からの復興の陰には津波で流されて亡くなった多くの命がある。そのことを忘れてはならないのだ。

◇感情

「愛慕」

みかの原わきて流るるいづみ川いつ見きとてか恋しかるらむ　藤原兼輔

連体形。この時代の高貴な女性は男に顔を見せないから噂を聞いたりすることで相手のイメージを膨らませる。会ったこともない相手を思う。恋の始まりだ。

をみなにて又も来む世も生まれまし花もなつかし月もなつかし　山川登美子

終止形。重い病の床で自らの死を思う。健やかに過ごした日の花も月も今は懐かしい。二つの「なつかし」の響きが切ない。

「喜怒哀楽」

来てくれて嬉しかつたと末娘のメモあり高校卒業の夜　平山公一

連用形。卒業式に出席した父親に感謝の言葉をメモに残した娘。素直な言葉が作者を暖かく包んだ。「嬉しかつた」が一首の中で輝いている。

筑波嶺に雪かも降らるいなをかもかなしき児ろが布乾さるかも　東歌

連体形。この「かなしき」は可愛いとか、いとしいとかの意味。飾らず率直に心のうちを男は歌う。しかも方言のままに。

◇感覚

「視覚」

手術せし膝の映像かかげられ未知なる人工のわが骨ぞ美し　菊地原芙二子

終止形。人工の骨に変わった部分を映像で見る。これは自分にとって未知のもの。でも信頼できる。希望につながる骨。

逢える日に一番綺麗になれるよう逆算しながら今日爪を切る　高田ほのか

連用形。恋人に少しでも美しくみせたい。逢える日のための準備を着々と。それはその日に綺麗な自分でありたいからなのだ。

「聴覚」

夢に見る妻はたいてい元気なり笑ふ、酒のむ、うるさくしやべる　桑原正紀

連用形。これは夢の中の妻なのだ。かつての健やかな頃の。「うるさく」が切ないほどに胸に迫る。

「寒暖」

吾を見る遺影の眼に対ひゐて眼球熱くなるにさからはず　大山敏夫

連用形。遺影はまっすぐに自分を見ている。自分も又その目を見る。その瞬間の身体感覚が「熱く」である。大事な人との別れ。

持ち帰り牛丼膝にほの温しバスの窓越し街の昏れゆく　釣　美根子

終止形。仕事帰りだろうか。もう夕暮れ。牛丼を買ったからあとは食べるだけだ。膝に感じる温もりに、ほっとしている。

◇印象

「雰囲気」

掻き混ぜて回して捏ねてぱちぱちと粘ればまこと男らしきよ　大山敏夫

連体形。「納豆とは言わぬが花。」という編集部の注がある。納豆を食べるまでのこんな所作に男らしさがあるなんて面白い。

走り根の絡まる上をおぼつかな鞍馬の山を妻と歩みき　綾部光芳

語幹。鞍馬の木の根道を妻と歩いた時はおぼつかない足取りだった。今はそのことも懐かしい。「おぼつかな」で蘇るその日の二人。

「性格」

几帳面な人よハンカチ携へきて病院のベッドの枕辺に置く　王　紅花

（連体形）入院しても常のように身だしなみを忘れない人なのだ。その几帳面さに改めて気づき、いとおしむ。

いつよりか苺つぶさず吾は食む老いて短気になりし証か　雁部貞夫

連用形。老年になって苺の食べ方が変わった。その理由に思いが及ぶ。ユーモアの漂う一首。

「視線」

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせし間に　小野小町

連用形。花の色に重ねて自らを振り返る。空しく過ごす間に容色が衰えてしまった嘆き。掛詞をふんだんに盛り込んだ名歌。

医師の手も美容師の手も優しかりわれに触れくるその仕事の手　吉田理恵

連用形。確かに仕事の手ではある。でもそこには人間としての温かさがある。病が治るように。美しい髪で居られるようにと。

形容詞と形容動詞がどのように使われているか、興味深い一冊である。　（飯塚書店刊）

十一月号作品二評

井上　菅子

ねこじやらしの穂に擬体する毛虫ゐて
その後どの穂も毛虫に見ゆる
本間志津子

「その後どの穂も毛虫に見ゆる」は、毛虫嫌いを婉曲に言って納得させられる。蛇嫌いが、縄でも紐でも蛇に見えるのと同じで、嫌いさの度合がわかる。

パンパンと華やかに咲く遠花火消えゆくさまは儚なく虚し　植松千恵子

花火が消えてゆくときはいずれ儚ないが、遠くの空に音なく消えてゆくさびしさはまた格別。遠花火が夏の詩情を醸す。

ちよつと待てちと待てと日にいくたびも注文多き猫に言ふなり　佐藤靖子

上の句は誰に言っているのかと期待をもたせ、注文多き猫であることがユニークな作。猫との日常を会話体で生き生きと表現し、猫好きの共感を呼ぶ歌。

今日もまた長茄子が取れうれしくてやき茄子にして夕食にたべる
早乙女イチ☆

茄子はプランター栽培かもしれない。畑にたくさん生るのとは喜びが違う。やき茄子にしてという食べ方がおいしそう。

足折れて保護したカラスに一日中クーラーかけて酷暑を凌ぐ　卯嶋貴子☆

ごみ置き場を漁るカラス、玉蜀黍を喰うからすなど、害鳥に詠まれる鴉の、骨折の手当をしてクーラーまでかけてくれる作者の命の向き合い方に頭が下がる。

起き抜けの湿気のない空気心地良くほんの少し季節が進む　川俣美治子☆

夏から秋へ季節の映る感覚を、「起き抜けの湿気のない」と言う。暑さとともにあった湿度の下がった快感を詠む。

気に入りの弁当それぞれ買いて乗る新幹線の振動滑らか　加藤富子☆

家族旅行の自由さが上の句にあり、浮き立つような気分が伝わる。新幹線の振動が滑らかと感じるのも、幸福感に依る。

のっぺりと増水した川流れ行く水音も無く只押される様に　安川敏子☆

増水した川の様子を「のっぺり」というオノマトペが効果的で、下の句の観察も的確な写実詠。

少しづつ日没の早くなりてきて猛暑の中にも秋は近づく　松居光子

秋の日は鶴瓶落しと言うが、そうなる少し前の季節。暑さの中にも日没の早さで、秋を感じている豊かな感性。

こんなにもこんなにも多くハイビスカス咲くは今年の猛暑を語る　野口秀子

ハイビスカスは南国の花で暑さを好む。「こんなにも」の畳み込みに、花数の多さを言い得た。そして猛暑を語った。

大股で前を行く孫振り返り何も言はずにゆつくり進む　西村邦子

余分な説明をせず事実のみ言って、男の孫であること、やさしい気遣いのできる孫であること、しっかり詠まれている。

吾の為すすべてを許容してくれる夫に只々感謝する日々　江藤ひさ子

この世に夫ほど理解して許容してくれる人は他に居ない。当り前のことを言っているようだが、真実の心を詠む。

十一月号作品二評

江波戸愛子

峯雲の沸き立つ空の片隅にうろこ雲淡くかかる夏の日　本間志津子

峯雲は入道雲であり、その雲のちかくに秋の季語でもあるうろこ雲を詠んで秋を待つ作者が浮かび、空がみえるようだ。

朝の戸を繰れば忽ち降り来たる庭の高枝の蝉しぐれはも　梶尾栄子

戸を開けたと同時に聞こえてきた蝉しぐれ懸命に鳴く蝉たちの声に感動をし、元気をもらったのではないだろうか。

五年日記の二年目になる雑な字なれど去年を読めばあれこれ楽し
植松千恵子

五年日記は筆者も使っているので下の句のあれこれ楽しに共感を覚える。もちろん楽しいことばかりではないのだが。

釣銭にありたる北里柴三郎はじめましてと財布にをさむ　鈴木計子

新千円札をはじめて手にした時に詠んだ歌であり、下の句に作者ならではの感性豊かな歌に惹かれる。

大木は終はりにすると白蓮を夫は伐りぬ真夏日の中　須藤紀子

庭の木も大きくなると剪定が大変になる、毎年ご主人が庭木の手入れをしていたのだろうか、伐った後は自然乾燥にまかせるご主人との微妙に違う思いを詠む。

一歩づつ進めてリフォーム完成し無口の大工も最後は笑顔　大野　茜

個人で仕事をしている大工さんだろうか、コツコツと丁寧な仕事をされる方なのだろう。下の句にその大工さんの笑顔がみえるようだ。この歌に私が嫁いで来た家を建てた大工さんを思い出した。

今日もまた長茄子が取れうれしくて焼き茄子にして夕食にたべる
早乙女イチ☆

ご自分で育てた長茄子ほどおいしい茄子はないかもと思いながらその茄子を焼いて家族と食べている作者の笑顔がうかんできて読むほうも嬉しくなる。他の歌にキンカンとみかんの歌があり、作者のやさしい眼差しを感じる。

家庭科の宿題持ちて来たる孫とミトン型の鍋つかみ作る　松居光子

近くに住んでいるお孫さんの宿題の鍋つかみを一緒につくりながら楽しそうに話をしている作者とお孫さんの声がきこえ笑顔がみえるようだ。すてきな鍋つかみができたのではないだろうか。

大股で前を行く孫振り返り何も言はずにゆつくり進む　西村邦子

いつもは大股であるくお孫さんなのだろう、いつものペースで歩いていて作者との距離に気付いて歩みを合わせてくれるお孫さんの成長を詠む。

チュンチュンと槇の梢に餌を待つ朝が来たよと雀らの群れ　江藤ひさ子

雀はいつも朝に食べ物をくれる作者のところへ来るらしい。群れとあるのでかなりの数なのだろう、雀はすがたも声も可愛らしい。わが家の後ろの家の瓦屋根でみる雀のすがたと鳴き声を楽しみにしていたのだが最近は姿を見かけない。カラスがくわえていったという話も聞くこの歌に雀の声を懐かしく思いだした。

十一月号作品三評

桜井美保子

サイパンに果てにし兄の手紙出しくり返し読む八月六日　水澤タカ子

少女の頃に受け取ったサイパンからの兄の手紙。帰国出来ずに、この地で果てた兄への追慕の心が籠る。過酷な戦争、平和への願い。結句に深い余韻がある。

ナイル川のクルーズ船上ダンサーが踊りを誘うベリーダンスを　新井光雄☆

中東、アラブ圏で発展したベリーダンス。船上での異国の空気感が伝わるような一首。回想の歌ではあるが現在形で歌っていて旅の一場面を生き生きと表現。

九州の母方の祖母に会いに行く孫におみやげ持たせて見送る　谷田律子☆

母方の祖母なる人を思い土産を用意して見送る作者。日常の一コマだが細やかな心遣いを忘れない作者である。飾り気のない表現でどことなく温かさがある。

足の指の血流のため履く下駄の鼻緒は鹿の子母買ひくれし　井上鈴子

靴よりも下駄の方が足の血流を良くするのだろう。健康を維持するために、大事に仕舞っておいた下駄の出番である。鼻緒の鹿子。母の思い出が溢れてくる。

夏のうち早起きをして体操をと脳はせかすも身体反抗す　佐々木政子

早起きして体操をやらなければという気持はあるが暑さも影響するのだろう。体がついていかない。脳と身体の動きは必ずしも一致しない事に気づいた作。

友からの半寿の祝いの同窓会皆で会えたと感謝の電話　山﨑　猛☆

同窓会の幹事役を務める作者。半寿の祝いを兼ねた会を開催し、喜ばれたようだ。ともかくも会を準備してまとめるのは大変なこと。参加した人からの感謝の言葉は何より嬉しいものだろう。

我が家に近き居酒屋選び呉れぬ吾の年齢を気遣ふなりや　井出裕子

作者は四十年前に小さな学校で七人の担任をしていたという。この歌はその四十年後のクラス会の歌。七人は遠くの会場よりも作者の家から近いところを選んでくれた。互いの思いが温かい。

五時起きの目に飛び込むはイワシ雲七月の空北のかなたに　立石　節子☆

イワシ雲というと言葉では秋を感じさせる。この雲は、雲の下の気温が高く、雲の上の気温が低いときに対流が起こることによって発生するそうだ。七月の早朝の空はそんな気象条件だったのかもしれない。自然の変化を見逃さず捉えた。

炎天下大阪・京都の喜寿の旅次男一家と宴とカラオケ　後藤恭介☆

猛暑の中でご家族との楽しい旅。その充実感を具体的に表現。涼しい店内で喜寿の祝いの会食やカラオケを楽しまれた様子。歯切れの良いリズムで軽快な歌。

梅雨明けて日照り続きの八月に里芋の葉はほぼ枯れ果てつ　岩村知康

台風の接近するとふ報道に雨降らす雲ひそやかに待つ　同

ようやく梅雨が明けたと思えば日照り続き。あまりの暑さに里芋の葉は枯れてしまった。ひそやかに台風の雨を待つ気持も分かる。農業の厳しさが滲む。

十一月号作品三評

橘　美千代

サイパンに果てにし兄の手紙出しくり返し読む八月六日　水澤タカ子

昭和二十年八月六日は広島に原爆投下の日。サイパンで兄君が戦死された作者はひときわ特別な思いを抱きこの日を迎えられるのだろう。戦地から家族を気遣いやまなかったという。手紙を取り出し「くりかえし読む」が切なく胸をうつ。

夕焼けのリヤドの書店に求めたるコーランを手に仰ぎしモスク　新井光雄☆

夕焼けのリヤドという初句から一首全体にわたり異国情緒に溢れていて惹かれる。リヤドはサウジアラビアの首都。発展を遂げ続ける大都市でありながら歴史の刻まれた地でもある。買ったばかりのコーランを手に壮麗なモスクを仰いでいる異邦人の作者。イスラム教徒らの祈りの声が聞こえてくるような心地がする。

アジサイとカサブランカを覆う草息子はかまわず草ごと刈り取る　谷田律子☆

自分で刈る事ができず、息子さんに頼んだところ、作者が日頃楽しみに愛でていたアジサイとカサブランカを雑草もろとも刈られてしまったと。あり得る。「やられた」という気持ちが溢れ出ている。筆者も庭の雑草と共に捩花を刈り取られてしまったことがある。残念に思っていたら、なんと翌年捩花は復活した。

願ひもち顔を近づけ真向かへば頷き給ふ如意輪観音　佐々木政子

信心深く真剣に願い見つめる者には観音様が答えてくれるように見えるのだろう。如意輪観音がよく合う。感じたままを言い切った下の句が一首を独創的に。

音のしてふり向けど人あらずして青柿一つ道に転がれり　同

不思議な雰囲気を醸して印象的な歌。音にはっとして振り向いたら何と柿であった。そうゆう事ってあるよねと共感。

十五時間の飛行の長きその間「猿の惑星」の映画観ており　塚本節子☆

十五時間の飛行の無聊を慰めるため放映される映画を見ている作者。旅の不安と期待が入り混じり眺めている様子。

漸くにヒースロー空港に到着す気温二十五度とアナウンスあり　同

長いフライトの後漸くヒースロー空港に到着。異国の地に降り立ち、いよいよだと気合が漲る様子が伝わる。下の句の現地の気温を告げるアナウンスが臨場感を高めて。事実を淡々と詠んだ上の句と下の句が自然に響き合っている。

蕎麦強し雑草生える余地はなく猛暑凌いで花咲かせたり　越澤太朗☆

きっぱりと初句切れ。作者の蕎麦への賛辞が表れている。びっしりと生えて雑草も退けるその強さ。農家にとっては頼もしい限りであろう。そして迎えた開花期。その花は白く可憐である。

梅雨明けて日照り続きの八月に里芋の葉はほぼ枯れ果てつ　岩村知康

青々と丈夫そうな大きな葉がたくさん連なっているイメージがある里芋畑。この夏旱天のため、あの葉が殆ど枯れてしまったという。驚きである。

作品二

小林　芳枝　東京

年賀はがきの印刷見本並びたり十一月の郵便局に
晴天を喜ぶやうに窓外の手摺を移る三羽の雀
夏の間に枝葉切られて庭に立つ欅四十六年の幹
年齢を忘れて過ごせと言ひ呉るる人あり八十の生日過ぎて
花ふたつ咲かせたる今年の月下美人わがベランダに馴染みて伸びる
昭和十九年に生れたる縁（えにし）もつ吾等秋のひと日のひと時集ふ
敗戦のさし迫る日々を守られて生まれてきたる吾等それぞれ

梶尾　栄子　兵庫

環境にやさしからずと知りゐつつ草焼く煙のたなびく夕暮れ
バラ園を寄り添ひ巡る夫婦連れ神戸からとふモダンそのもの
コンバインの落とせる土塊嵩高く不用意に踏めば捻挫しさうな
蓄への大切を娘は学びたるやスーパーに米無く無心に来たる
奥さんのお手製マスクは絞り染めわが箪笥にも眠る絞りの
孫のごと緊張しつつ聞く講談入門間なきもとちらずに終ふ
講談師は地元出身初陣に祖父も顔見す自治会館に

十一月号　十首選

冬雷集　益坂　順子

自らの重みに垂るるダリア咲き添へ木　赤羽佳年
ごと揺る天つ日の下
老たちの笑顔あつめてコスモスの花が　冨田眞紀恵
ほほゑむ施設の午後は
これまでと同じ気温も何かしら過ごし　山口　嵩
易さを招く虫たち
草も人も群れると強さ増しゆきて境界　髙橋説子
線を軽々と越ゆ
引越しに挨拶交したるのみに以後隣人　大塚亮子
に会ふこと非ず
ああ疲れた言葉になれば本当に疲れた　町田勝男
やうな散歩の終り
お祭の提灯屋台に並ぶもの貼らるリハ　稲田正康
ビリ八月の室
人生に例えてみようかベイスギの険し　佐藤幸子
き斜面に進めず戻れず

ブレイクあずさ☆

玄関の鉢のライラックをはりたり吾に　姉川素枝子
来る春ありやなしやも
どこまでも晴れて雲無し盂蘭盆に訪ひ　井上菅子
ゆく家ももう血が遠し

楚々として秋明菊の揺れつつもその根を延ばす強さを持てる

加藤　富子☆　栃木

三年間の修練期間を成し遂げて初誓願式の娘晴れやか
シスターマリノの名を与えられ修道会の人となる娘聖書を友に
教会の儀式も初の体験にて参加の我ら気遅れのする
家族との時間の配慮も有りがたく修道院での歓待嬉し
三年ぶりに逢いたる娘はシスターの顔なり健やかに穏やかにあれ
つれあいの祥月命日十月二十六日偶然にも娘の晴れの日となる

東　ミチ　青森

秋刀魚二本吾には初物ガス台に焼くかたはらで大根おろす
日めくりの名言に深くうなづきて暫くすれば言葉つなげず
秋仕舞終へたる庭の八手の木に蕾ふくらむ間もなく真冬
祭壇の友の遺影の視線を受けて涙とともに手を合はすなり

植松　千恵子　静岡

30度の夏日が一変今朝寒しまたぶり返すか四季崩れゆく
世界には気温52度の国があり水浴びできぬカバ・サイ哀れ
百歳が好奇心持ちグーグルで調べてやらうと言ふ心意気
初めてのネット投稿ドキドキす打つが遅しと急かされながら
大相撲静岡巡業の余興にて迫力の力士とかはいい豆力士
忘れ難し「太陽がいっぱい」のメロディーとアラン・ドロンの青い瞳

十一月号　十首選

十一月集／残響集　山口　嵩

平底の小瓶押しゆく植穴に二粒づつ蒔　小林貞子
く大根の種
湯上りに窓辺によれば虫たちの声の賑　佐藤幸子
はふ夜の涼気に
澄む空に白雲むつくりをちこちに暑き　山本述子
中にも秋の気配す
おりふしに樹木を揺らす飛び切りの風　川上美智子☆
が吹き来る其を待ちおり
とりあへず百まで生きると決めにけり　松本英夫
学び進めんゆらりゆるりと
ゴーグルの先をクマノミ通り行く枯れ　藤田夏見☆
たる珊瑚の白の無機質
差し掛かるガレ場に花の咲き盛りちか　益坂順子
らを貰ふ竜胆の青
突然の吉報に吾ときめきぬいい夫婦の　髙橋朱美☆
日孫入籍と
交通系ＩＣカードをチャージする旧札　片桐美穂子☆
のみでおつりが戻る
早朝のブルーピンクの空広く白き月の　猿渡憲子☆
みポツンと光る

早乙女　イ　チ☆　栃木

黄色くて丸いキンカン取ろうかなお酒に漬けて早く飲みたい
ミカンの実沢山取れて隣の人あちこちの友に食べてもらいぬ
ミカンの木の下に生き生きとむらさきの菊のつぼみが数多咲きそう
高高と黄色に輝く柚子の実が昼の日ざしに爽やかに見ゆ

卯　嶋　貴　子☆　東京

柿の木に小鳥が来ては囀りぬ老いの家居のたのしみのひとつ
雨が止み冷えた空気が入りくる十月末の寒い一日
梅の木は涼しくなりてパラパラと緑の葉を枝から落とす
日が短くなりて歯医者の帰り道暗くなり空に月が輝く

大　野　　茜　神奈川

初盆の迎へ火を焚き兄を待つふはりと煙たちて消え去る
朝々に小梅をひとつ頬ばりて熱中症に罹らぬ自信
久し振り猫じやらし手に振り回す友との戯れ思ひ出しつつ
立秋の過ぎたるこの日に油蝉そろりそろりと初に鳴く朝
秋茄子の苗一つ買ふ酷暑の日リュックに入れて地下鉄に乗る
根分けして小鉢に育つ胡蝶蘭二年経て開く純白の花

児　玉　孝　子☆　愛知

朝食を早めに済ませ大根とかぶの種を蒔く十月二日
骨密度の検査を受けて結果待つ正常値と聞き不安の去りぬ

十一月号　十首選

作品一　石渡　静夫

表紙絵の月下美人に励まされ月々の仕事熟し来りぬ　桜井美保子
己を主張するがに髪のいろ緑・ピンク・黄それもいいかな　野村灑子
到着を安堵の吐息と共に言う末の子案じる娘は親となり　高橋燿子☆
日本のメダルラッシュにここまでの時間と努力とプレッシャー思う　浜田はるみ☆
何となく過ぎてゆく日々が幸せと思えることが幸せと思う　野崎礼子☆
戦後七十九年の様変り老いたるわれは戸惑ふばかり　岩渕綾子
風に乗り行く蝶速しこの熱き九月の庭を繰返し飛ぶ　林美智子☆
姥百合の名には決して負けず立ち酷暑の庭に白際立たす　村上美江
雨の日の安らふ音につつまれて無となり憩ふこだはりすてて　戸部田とくえ
日の暮れに点る駅舎の電灯に群れ飛ぶ椋鳥は尚も勢ふ　井上槇子

巻き爪のひどく痛みぬ皮膚科医に切れば痛みは治ると言わる
痛みより解放されたく治療室にてメス入れ我慢数分で終う
四十本さしたる諸の収穫日子等三人は移植ごてに掘る
十月を終るも未だに生るピーマン捩ぎて独りの御数に添える
七回忌を終えて夫の遺影をば両親に並べ高きに飾る

永　野　雅　子☆　東京

暖かき飲み物と飴携えてホテルに入り階段昇る
全員の名前は覚えられずとも手伝い済ませ席に着きたり
壇上のパネラー達の解説に深い意味合い気付かされる
空腹に提供された昼食は吾の胃袋にしっかり収まる
表彰式いつかは吾も続きたし秘かに思う神無月の午後

安　川　敏　子☆　埼玉

トラックも空から見れば蟻のよう大橋渡る蟻の行列
朝顔の花が小さくなる頃の風はやさしく温もり恋しい
主亡くなり三年になる家ありて白い小菊が片隅に咲く
我が家に枯葉散りいる雨上りむくげの花も今年が最後
冬物のセーター出して何となく思い出に浸る夕影の中
九十八歳年齢忘れて富士登山する女性あり只々驚く

西　村　邦　子　兵庫

健やかに夫の傘寿を迎へたる記念に行かうクルーズの旅

十一月号　十首選

作品二　大塚　亮子

薄の穂ねこじやらしの穂咲き乱れ野辺に日暮れの少し早まる　本間志津子
雨降りの今日は気の急く用も無く友の電話の長きにつき合ふ　梶尾栄子
釣銭にありたる北里柴三郎はじめましてと財布にをさむ　鈴木計子
外気温下がらねど今日の空の色薄雲刷きて秋の兆せり　須藤紀子
咲き終はり枯葉となりぬフリージア十一代目の球根を掘る　大野　茜
起き抜けの湿気のない空気心地良くほんの少し季節が進む　川俣美治子☆
冷蔵庫の卵もレタスも使い切り明日からしばらく沖縄旅行　大塚雅子☆
友と帰る車窓に稲穂の倒るるを憂ふるは農に勤しみし顔　野口秀子
大股で前を行く孫振り返り何も言はずにゆつくり進む　西村邦子
ストリートダンスを踊るレジ袋適度な風を上手に拾い　藤田英輔☆

大海原の水平線より昇る朝陽がクルーズ船の二人を照らす
おすすめのドレスコードにお洒落して今宵も続くエンターテイメント
船中の長い夜の楽しみは星空の下のムービーシアター
二階建てハトバスガイドの右左見上ぐる景色がたちまち過ぎゆく
高層のビルの谷間に見え隠れどこか懐かし東京タワー
別世界の船旅の余韻薄らいで日常生活ゆつくり戻る

川　俣　美治子☆　栃木

大好きな大福と茶でティータイム青空見上げる深まる秋に
青空をくるりくるりととんび舞う飽きずに見ている山に消えるまで
アイスからホットに替えたコーヒーを飲みながら見る曇り空寒し
夜になり強くなりくる風の音聞き入る我に少しの恐怖
部屋奥に届く日差しの暖かさに足当ててみる今日は立冬
木枯しが吹く季節になり思い出す今年の夏の異常な暑さ
こたつ出しスイッチ入れず足入れるそれだけでよい我が家の冬支度

松　居　光　子　三重

十月も半ば過ぎたる外出に片付けゐたる夏服を出す
蒸し暑さ戻りたる日の車内の人長袖のあり半袖のあり
ひとり居となりたる姉を気遣ひて子はグループラインを作りくれたり
パソコンに数多のメール届きゐてその大半が迷惑メール
利用してゐない銀行やカード会社より怪しいメールが日ごと送らる

十一月号　十首選

作品三　天野　克彦

サイパンに果てにし兄の手紙出しくり返し読む八月六日　水澤タカ子
アルジェのホテルの朝に聴く祈りこれぞアラブと異境に興奮　新井光雄☆
退院の夫の衣類を濯ぎ干す庭に咲き初む秋海棠淡し　奥山清子
アジサイとカサブランカを覆う草息子はかまわず草ごと刈り取る　谷田律子☆
おつとりの子に掛かりたる鯵三匹あまりに小さく天麩羅にする　井上鈴子
天上の白雲動かず地の木の葉少しも動かずひたすら照りをり　佐々木政子
教へ子と四十年ぶりの再会に思ひ溢れて言葉探せず　井出祐子
五時起きの目に飛び込むはイワシ雲七月の空北のかなたに　立石節子☆
青空は不気味な雲に覆われてゲリラ豪雨を呼ぶ風冷たし　金子八重子☆
草刈ればバッタ蟋蟀飛び跳ねて初秋の畑は祭りの如し　越澤太朗☆

年賀状の遣り取りを絶つ風潮に今年も買ひぬ葉書五十枚
年毎に買ふ年賀はがきの減りて来ぬ大切にしたし残る交はり

谷　田　律　子☆　栃木

神無月霜月も種まきの時期にして春の収穫思う楽しみ
立冬の夜空に高くあかあかと下弦の月は小舟のごとし
狭き道チョコチョコチョコと横断しかわいい鳥は渡り終えたり
石川君はガキ大将のいじめっ子石をぶつけて泣かした私
十五夜にすすきと野菊花器に差し月に向かいて合掌をする
耕した畑の土の匂する近くの木々に数羽のすずめ

津　田　美知子　岩手

滅多に無き鏡のやうな大船渡湾映る景色に船は線引く
漁り火の沖に二つ三つ灯りをり震災前の明るさ消えて
連なりて南に渡る白鳥の鳴き交はす声は励まし合ふやう
吾が命生まれ変はりて来れるなら再び夫と巡り会ひたし
久々の夫と二人の外食は開店間もなきラーメン屋とす
音も無く近づく夫に飛び上がる吾と暫く笑ひ止まらず
手術近き夫と会話楽しめど独りになれば不安増しくる

水　澤　タカ子　山形

本は宝とつねづね言ひし亡夫のこころ思ひつつ読む夜の長きを
師とともに読売書法展を見てめぐる分厚き図録を脇にかかへて

歌集／歌書御礼

編集室・佐藤靖子

■原島勝子歌集『歌舞伎の郷』

令和六年八月十四日、五六七首を収めて発行。題名は、著者が生まれてから住む、秩父小鹿野町に栄える地歌舞伎からとった。小学校教員生活を卒業したのちも地域に貢献し続ける姿が見える。幸せ日記とも言える一部を紹介する。

民生委員のほか、小学校の授業前十五分間の「読み聞かせの会」また「おはなし会」それらのための勉強会もする。

暗唱しお話会へ向かふ道花菜明かりに心やすらぐ
図書館の大人のためのお話会明日はいよいよ本番となる
ひとり住む人のいかにと雪の道ひたすら登り弁当配る
施設にて納涼大会身寄りなき老に寄り添ひ時を過ごしぬ

秀逸賞を受けたる書友の祝賀会グランドホテルに楽しむ今日は
短歌二首を料紙に書きぬ天竜市芸術祭の近付きたれば
早春に紅花を植ゑ紅餅に仕上げて待ちをり絹に染めるを
授業にて教へしことあり紅花染めを黄色の液に酸を入れ紅に

松　﨑　みき子　岩手

晩秋に川沿ひの鴨群れながら夕陽の中へ低く飛びゆく
川面には紅葉映りて光揺れ集落の田に鷺三羽居り
河港から津波は九キロもさかのぼりし日を思ひをり復興の今
沢水で殻付き胡桃洗ひをり枯葉もちらり沈みゐる水に
畑から大根抜いて煮物する自給生活便利な気分
根生姜の葉の強き香に球根の土入れ時期の畑日誌見る
老木の梅の枝いたはり剪定す根本も心配腐葉土を買ふ

井　上　鈴　子　山形

農道に咲きのこりたる溝蕎麦に生家の稲刈浮かび足止む
暑さゆゑか丈の伸びたるコキアの群れ色づき半ば雨に倒るる
一之輔の落語の会に声を立て笑ふ甥見る久方振りに
里芋が今年豊作と持ちくるる友は大きなバケツに三つ
里芋の皮剥き小分けに密封し十三袋を冷凍にする
庄内風の味噌の芋煮の旨けれど醤油に牛肉が一番と二男
鍋いつぱい無花果入れて砂糖入れ囲炉裏に掛けにきわれらの御八つ

勉強する人はどこまでも勉強する。
二重まる貰ひて嬉し仮名書講座子
どものごとく飛び跳ねたしも
女歌舞伎も活躍する。（小鹿野町役場）
木造の新庁舎祝ふおひろめの女歌
舞伎の声澄み渡る
町中が歌舞伎役者にと職員の夫も
演じし日本駄右衛門
中学の文化祭にて小鹿野歌舞伎曽
我五郎が上演されたり
子供歌舞伎、ウラジオストックで。
子供歌舞伎初の海外公演の実施報
告書夫にも届く
白浪五人男演じし医院長（ドクター）はすつか
り小鹿野の住民となる
誰でもが平和を願う。
ただ一つ願ふは平和宇宙より賢治
もわれらを見守りをらむ

（響叢書第43篇　いりの舎刊）

■府川富造歌集

『鳶』

令和六年十月五日、五一七首を収めた第五歌集発行。湘南に住み、山川の

作品三

フランス詩集

新　井　光　雄☆　東京

読み終えたメーテルランクに乾杯し仏語の会は十年を超す
記念にと多少無理でも次は詩と「フランス詩選」まずはランボー
「嬉しい」と仲間の女性が声あげる詩を読めること「夢であった」と
仏語好き主婦で留学した友を軸になんとか詩を読むレベル
思い出はビデオ観ながら勉強の「シェルブールの雨傘」シナリオ完読
月二回まず挨拶の「ボンジュール」いまだ恥ずかし口にするのが
仏語会まず全員でテキストを朗読するが仏仏仏仏（ぶつぶつぶつぶつ）
パリ五輪行ってみようと検討し金も力もなくて断念
あと何年この仏語会続くのか手にする詩集は八十路に重し

奥　山　清　子　山形

遅蒔きのくきたちの芽ビッシリと夢は令和七年の春
町給付金申請終へて安堵せり定額減税実施によるとふ
其れぞれの技の結集なる町文化祭心込めたる人をぞ思ふ
迷ひ事多くありたり秋の夜のスーパームーンに救ひ求めむ（十月十七日）
小さき実鈴生りになり枝染むる「紫式部」は孫の記念樹
彼岸花・萩・ほととぎす・紫苑・韮・晴れたる花野秋酣に
三時草・十文字草の小さき花葉げいとう色づき秋深まりぬ

草木、高く飛ぶ鳶やカモメなどが著者のお守りのように存在しているようだ。何か断ちきりたいことや徐徐に増しくる生への不安心そこからくる孤独感などが伝わってくる。

集中一番多かったのは、図書館に関する歌である。著者の身の置き場の一つだ。

現在「青南」所属。

椅子に掛けてしばらくゐたり図書
館ものびのび出来る場所でもなく
て
図書館を出づればたちまちかろや
かな足取り第一歩第二歩この感じ
なり
図書館に行くもためらふ日が続く
三月の庭イチハツ蕾めり
図書館の南の窓の隙間よりかく近々
と樟の葉ひびけり
また同じほど多いのが「兄」の歌。
小学校低学年のわが返事わたしに
兄はゐないと答へき
兄とわれこの世に二人の兄弟とな
りしよ年の差二十歳のままにて
留守宅の兄のもろもろ整理するひ

佐々木　政　子　岩手

立ち並ぶ銀杏並木の一夜明け魔法のごとく黄色に染まれり
美容室を出でて歩めば突風の今整へたる髪を乱しぬ
窓をあけ見上ぐる空の雨止みて雲の流るる晴れてゆくらし
夕暮れの何時しか暗雲たちこめて移りゆく早し西空明るく
咲きさかる百日紅の枝に吾が肩の触れたるときに花の散りたり
歩みゐて嵐かと思ふ風吹きて枯葉散るなり野辺の地蔵尊に
蛇行して倒れむばかりの若者のバイク一瞬われとすれ違ふ

立　石　節　子☆　東京

来年も出席したしと友が言う六十三回冬雷大会
覚悟しての友の出席叶いたり大会中の豊かな笑顔
伝えると伝わることは大違い表現力の乏しき身には
不確かな事多くして希望あり冬雷大会次期開催も
昔から天変地異の多い中脈々続く人の営み
老夫婦自然食品商いて五十年余の誠実な業
夫逝きて初めて知りし寂寥感枯葉流るる音に聴き入る

山　﨑　猛☆　埼玉

同窓会楽しきことのみ浮かびしと便りくれたる友の訃報あり
終戦後親と一緒に上京せし友の消息無性に知りたし
ゼロ戦の絵を描くことの好きな友子供心に今も忘れず
玉子焼き娘は母を見習うがおなじに出来ぬとカラを見つめる

まにも兆すうちなる怒り

昭和十九年に著者が生まれた時には既に六人の兄が亡くなっていたという。次に多かった歌種は浜昼顔である。

砂浜に這ひつくばつて熱砂にも耐へて咲きゐるはまひるがほは
午後四時の光しづかに低き花ハマヒルガオの媚ぶることなし
熊蟬や鳶をいとしむ。
熊蟬の生息場所も広がりて町中にても声を聞かしむ
鳶見つつ何時とはなしに湧きいづるこれの力や一歩を踏みだす
いつものやうに柳の末（うれ）の枯枝に鳶憩ひをり川の夕暮

（短歌研究社刊）

■古川陽子歌集『顔あげて』

小林芳枝

令和六年六月十二日発行の第一歌集である。六十三歳の時に偶々受講した「小池光短歌口座」がきっかけで歌を

十一月に台風四つも発生は観測史上初めてという
静岡に仕事に来れば地元のハンバーグ食べて帰れと客に奨めらる
「さわやか」と言う店に来て食べたれば確かに旨し今までになし

高　藤　朱　美☆　茨城

弱りたる胃腸に朝の粥を炊く優しく届きて良薬となる
免疫の力説きつつ子等からのサプリ届きて苦笑いする
白く照るスーパームーンは西の空薬局への道吾につき来る
大谷選手の肩の怪我気になりて遠き日本より痛み案じる
残暑にて種蒔きの時期のがしたる春菊小松菜急ぎ蒔きたり

羽　田　孝　輝　山形

雪囲ひせねばならぬと思へども気持ちは重く暖冬願ふ
日差し受け沼の上飛ぶ秋茜数多煌めき合ふ移動体
地上波の偏向報道目に余り真実探しネットに見入る
莢蓯の赤き実啄む鵯はわれに気付きて飛びたてり
体寄せくつ付き眠る猫たちを猫饅頭と呼びて触りたし
ジャム作り栗渋皮煮どれもみな手間暇かけて思ひを詰める
網戸より入りくる風は心地良き金木犀の香り乗せくる
洗ひ終へ大根干したる五十本何度も軒端を見上ぐる夕暮れ
猫たちの毛柄それぞれ違へども白い手袋白い靴下

後　藤　恭　介☆　茨城

久びさの健康ランドに秋の風畑帰りの汗を流しぬ

作り始め、二〇一六年に「短歌人会」に入会、小池光氏に指導を受けて来られた十六年間の作品である。

ながながと伸びひとつしてうらがへり冬の日向に背をこする猫

十五年暮らしたという飼い猫の仕草を捉えた何でもないような所に写実の確かさが見える。三句「うらがへり」は猫の動きを見事に繋げている。家族を詠んだ歌も多い。

アオダモの花咲く五月に逝きし母
クリームソーダが好きだつた母
木蓮の銀のつぼみの手ざはりは父のかぶりしあの冬帽子

「クリームソーダと冬帽子」が生前の父母を思わせる。

夫を詠んだ歌

節分に豆撒くことも無くなりぬ夫とわれとのふたりの暮らし

子供が成長した後の静かな日々が見えて来る。優しい方なのだろう。

自分を詠んだ歌

みつつばかりの用足しに出てまたひとつ忘れて帰る山茶花の道

成程と私などにも思い当たる物忘れ

流れゆく上下の雲は逆方向露天風呂にて空を見つめる
美術館の印象派展見学す絵画の歴史を学びいる秋
戦火なき国の縁側で月見酒大吟醸とだんごと枝豆
演奏会はクロマチックのハーモニカ音域広がり楽しく聴きぬ
秋雨に駅まで妻を送りたり太極拳の会合あるらし
出席の冬雷大会二回目にて同好の友とLINEの交換

金　子　八重子☆　千葉

シャンプーで手軽に染まる白髪染め六種目にしてこれぞに出合いぬ
熱中症にならず過ごせたこの夏の電気料金見て良しとする
指先の震えも打牌のゆっくりもありありルールの健康麻雀
コスモスとアワダチソウが咲き出して遅れ馳せなる秋を告げおり
A型と言い当てられてやっぱりねっていかにもダメだと言われた気分

首　藤　文　江☆　埼玉

嘘のよう昨日の暑さどこへやら一枚羽織り襟元締める
木犀の香り漂う道すがら柿実りいて秋らしくなる
上り坂息弾ませて駆け上がる一面に広がるコスモス畑
待ちに待った古本市へ今日こそは靴磨く手に力が入る
もう少し秋を味わい過ごしたし赤トンボ柄の湯呑み使いて

岩　村　知　康　長崎

日々歩む道の林縁ひとところ枇杷の花の香かすかに匂ふ
新枝伸び枇杷の花穂はひそやかに秋から冬を咲きつづくらむ

である。

二人が見える歌

俺はいま何をしようと思つたと聞かれてわかる妻にはあらず

下句の歯切れの良さに夫との程良い距離が感じられる。

比喩のある歌

わが膝に眠れる猫が野をわたる風のやうなる寝息をたてる

どんぐりが風のつぶてのやうに降る　小栖林の小径をゆけば

自然体で出てくる比喩にも柔軟な心が反映されているようで頷ける。

タイトルになった歌

空をゆく雲のすべてに「戦争はすぐにやめろ」と書きたい春だ

私も同感。世界中の人が見えるように。私と同年の著者の明るさに惹かれる。

（六花書林刊）

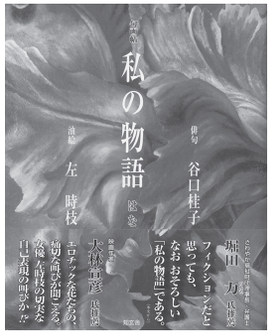
早足で歩く脚力鍛へむと今日も出でゆく団地の内外
はなみづき春に花々愛でをりし街路に今はもみぢ葉の照る
はなみづき紅葉極まる一本を燃やすごと染め日は入りゆけり
市の木なる南京櫨はここかしこ枝伸び四季の折々に愛づ
街路樹の南京櫨の木々の葉の緑のままに冬に入りゆく

（☆印は新仮名遣い希望者です）

谷口桂子
左　時枝　句画集

『私の物語 はなのとき』について

大山　敏夫



左時枝氏が「第四三回創展協会賞」を受賞したのは二〇〇九年だとある。「創展」は嶋田正之氏の作品があるので毎年観てきたが、話題の個性的な左氏作品も一緒に欠かさず鑑賞させて貰ってきた。そして、その左氏が俳人谷口桂子氏とのコラボで出版した句画集『私の物語 はなのとき』も興味深く購読したのであった。二〇一〇年の春のことだ。

共に28の作品を見開きに配置してのコラボで、美しいカラー印刷のA5変型判ハードカバー、本文64ページというコンパクトな装幀となっている。帯には、主に句に対して〈フィクションだと思っても、なおおそろしい「私の物語」である〉と堀田力氏の推薦文があり、同様に画については、大林宣彦氏の〈エロチックな花たちの痛切な叫びが聞こえる。女優左時枝の切実な自己表現の叫びか!?〉が掲げられている。

この書がどういう企画でどういう経過を経て出来たのか、その28の作品の選出に互いにどのように関わったかということなど特に述べられていない。コラボだから句と画がどう組み合わされるかは重要で、そこに著者がどれくらい関与したのかも分からない。所有する本に挟まれている左氏の挨拶文には、「俳人の谷口桂子さんに誘われて、この様な句画集を作っていただきました。スゴイ俳句とのコラボ・・・・?」

とあるので谷口氏のサイドが主導的に動き、句を主として配置されて行ったのかと推測される。

左氏の「スゴイ俳句」の言葉は単純ではないが、それは同性の立場から見てもちょっと「スゴイ」と感じさせた内容だったのかと思われる。男性の堀田氏が「なおおそろしい」と述べている句とは如何なるものか。左にその巻頭見開きページの画と俳句を並べてみる。

春の雨どちらともなく時計はづす

帯の堀田氏は、この句について、「はづす」のは、私と男。世を忍んでかなりの逢瀬を重ねてきた二人であろう。このような情景は、散文や短歌では描けないし、画像でも音楽でもあらわせない。一句に短編小説ひとつ分が凝縮している。」と述べる。いわゆる事実をありのままに描写する写実俳句ではなさそうだ。そして堀田氏は次の句をあげている。

ハンカチの折り目に妬心走り梅雨

抱かれてもかのひとを恋ふ夜の菊

炎昼の喪服に秘める妬心かな

これらの句にそれぞれ左時枝氏の画が一枚ずつ配置されているわけだが、先にふれた巻頭の画は、濃淡の紅を押しひらくシクラメンの花で、濃い紅の奥深くに秘めたる花蕊も濡れ濡れと覗く。ちなみに「ハンカチの」の句には淡紫の「酔芙蓉」、「抱かれても」には、ドライフラワーの様な枯れ色の「キングプロテア」。関係ないかもしれないがその花言葉は「自由自在・甘い恋」だそうである。そして「炎昼の」句には燃えるようなまっかっかの「赤いユリ」で花蕊が異様に太ぶとと立っている。という具合で、句と画との関係は見比べて感じ取るより仕方ないようである。

購入時に少し観て「これは、ちょっと」と思った私は以後今日まで書棚に立てたままにしていた。その原因は主に句との関係にあったのだ。左氏が「スゴイ」と言ったことに繋がるか否かわからないが、句の方に作者の全人格が投影されているという重さや真剣さが感じられ無かったからである。小説的、言わば拵え物の「おそろしさ」などに人が簡単に動くとは思えない。さらにこれらの句が左氏の28の作品に触発されて特別に作った新作品でもなかった点が物足らなかった。谷口氏に既刊句集もあり、それら作品の中より画にふさわしそうな句を選出したようなのであった。そういうのは真のコラボとは言い難い。

帯の大林宣彦氏の「左時枝が男であり、それで画家であったなら、花蕊（はなしべ）だけで花の絵を描くという技法は一つの発見であったろう」の言葉には納得した。先ず男性であったならこの描き方はしない。男性にこの技法を使割れたら、ちょっと引く気がする。大林氏は「然し彼女は女優である。女優である時枝さんにとって、花を花蕊のみで描くというのは極く自然の流れ、いやいっそ切実な願い、欲望ですらあったのではないか」と続けている。

つまり左時枝氏の画は、昭和二十二年生まれの団塊世代で一人の女優。沢山の映画にも出演して熱演し努力して技を磨いてきた。当然あまたの恋やら失恋やら、身を捩る嫉妬心も経験したかもしれない。映画から舞台へ、テレビ界へと転出して女優としての生き方を貫いた。同時に幸福感もたくさん味わった。結婚をして家庭を築いた。当然料理も作るし掃除洗濯もするだろう。そして油絵がある。一九九九年第一回個展を開く。二〇〇〇年、第二回「花鳥」二人展を市田喜一氏と開いた。二〇〇四年新宿で油絵展を開く。そういう流れの中で「創展」への参加。ザッと巻末のプロフィールを纏めただけでも重々しい。こういう一個の人間としての歴史を踏み締めた上に現在の画があり、著書『私の物語 はなのとき』があるのだと思う。ただどうして「花蕊（はなしべ）だけで花の絵を描くという技法」に執着するのか。左氏の秘むる「願い、欲望」やむにやまれぬ「渇望」がどこから来て何なのか、それは曝け出すように露わにされた「画」から感じ取るしかあるまい。

句画集『私の物語 はなのとき』は俳人谷口桂子氏の俳句とのコラボを試みた本である。述べたように、コラボとしては完全にうまく行ったとは言い難い気がしている。俳句と絵画のコラボ。それは企画としては十分に狙える魅力たっぷりなものはある。そういう試みが今後もなされることを期待しつつ、一番良いのは、左時枝氏ご自身が俳句を勉強されて、その自前の句と画のコラボをすることであろうか。きっと本物のコラボが出来ることだろう。

さて『私の物語 はなのとき』には一枚だけとても変わった画が閉じ込められている。句は、

またといふ言葉頼みて夏果てぬ

である。画は大きく咲き盛る「ヒマワリ」を裏側から観た構図となる。この後ろから捉えた花の作品はとても斬新に感じた。後ろ向きに立っている姿からのイメージで、句は別離の情が選ばれているのかもしれないが、この句は画にマッチしてある種爽やかな世界を作る。その画像が次頁上のもの。

句画集のサブタイトル「はなのとき」の「はなの」は、「美しいこと。盛りであること。時めくこと」などの意味を持つ形容詞であるが、そうした瞬間瞬間の「私の物語」なのだろう。

子役としてデビューした映画『荷車の歌』ではキラキラと光る眼の力強い演技だった。だがいつもこうである訳ではない。時にはギラギラしたり、ドロドロしたり、おどろおどろする演技もカサカサに乾いた演技も重ねてきた筈である。これらの画の一枚一枚が、常に「女」としての真実で演技してきた女優左時枝の偽らぬ有りの儘の自画像だったような気がする。

最も最近観たテレビでの時枝氏は、真っ赤な血をどくどく流した死体を生々しく演じていた。

＊本は「知玄舎」二〇一〇年刊・　定価本体一四〇〇円

■青南　12月号（終刊号）第27巻第12号　通巻三二四号

届いたばかりの「青南」終刊号を拝読した。右の通り第27巻通巻三二四号にあたる。表紙は原田文氏の美しい油絵「帆船」である。何処かへ旅立つ力強い帆を張っている。本文79頁、中にカラー印刷の記念集合写真等を8頁に編集し眼で追う歴史を纏め、次いで丁寧な年表を20頁あまりに載せている。

通常の雑誌部分は前半の40頁となる。一三〇名程の出詠があり、作品欄は9ポイント二段組の22頁であった。光沢のある白の上質紙で美しい誌面が続く。土屋文明作品鑑賞（六十回）、小市巳世司短歌合評（一五六回）も粛々と掲載されている。いかにもアララギの雑誌という重厚さだ。

じりじりと迫りくる何かに耐へてをり得体の知れぬ何かそのもの　　堀江　厚一

決心をせねばならざるどん詰まり落葉を踏みき一年前は　　伊藤　和好

「青南」は一年前に発表し計画的に幕を閉じた。すばらしい雑誌が又一つ使命を終える。　〈大山敏夫〉

■島木赤彦の一首鑑賞　8

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波に
うつろふ　　**島木赤彦**『太虚集』

右の意としては、湖の氷は解けたが依然としてさむい、三日月の影が波に揺らめく。と詠っている。春の近づく気配である。この歌の作者は何か屈託を持って湖畔に佇んでいるのだろう。

暖冬つづきの近年は諏訪湖も例外ではなく全面的な結氷は見られず．あの有名な御神渡りもお目にかかれなくなった。真冬の珍しいあの景観も見られなくなって寂しい。氷のきしむ音あの光景を見ている者にはこのような感慨が去来することであろう。この地に生まれこの地に育ってこの音を聞きこの動きを見て育った赤彦には特に感慨があろう。

因みに島木赤彦名での作品発表は『馬鈴薯の花』（大正二年）を出版したときからである。

『馬鈴薯の花』はアララギ叢書第一編で中村憲吉との共著。叢書の第二編は茂吉の『赤光』となる。

かの有名な「ひた走るわが道くらししんしんと怺へかねたるわが道くらし」は上諏訪に居た茂吉が左千夫の死を下諏訪高木に居た赤彦に知らせるべく走ったものである。

〈赤羽佳年〉

島木赤彦研究会入会案内

●島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。

●会長　髙橋　克

●島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。

●そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。

投稿などの機会が得られます。●（年会費二五〇〇円）

●本部事務局　江戸川大学　髙橋　克　研究室内

〒270-0198　千葉県流山市駒木四七四

☎　〇四（七一五二）〇六六一（代表）

●交流誌ご批評御礼　「新アララギ」11月号「歌壇座標」欄より転載

左耳いつまで拗ねる聞かせてよ鳥のさへづり風鈴の音　　吉岡　松世

ひたすらに庭を覆ひて白き花咲く十薬に而今を思ふ

【八木康子】　「冬蕾」九月号の「九月集」より。一首目、不自由な左耳に難儀する暮らしを、ここまで軽やかに詠む作者の人となりに惹かれた。上の句の「いつまで拗ねる聞かせてよ」と、気の置けない友達にでも言うように詠う作者から、日々の暮らしの一端が想像できる気がして楽しくなる。下の句の「鳥のさへづり風鈴の音」も、誰もが季節の恵みとして慰められるチョイスだけに、しみる。二首目の「而今（じこん）」は見慣れない熟語だったので、スルーしてしまうところだったが「過去にも未来にも囚われず、今のこの瞬間を精一杯生きること。仏教の禅語」と知り、改めてじっくりと味わうことができた。「十薬」はどくだみを乾燥させた漢方薬。ここでは、その臭気を嫌われて抜かれることがあっても、絶えることなく、時が来れば十文字の白い苞を開く健気さ、強さに重ねて成った一首かと思った。

【小田利文】　前評により作品への理解を深めることができた。一首目、「鳥のさへづり風鈴の音」は前評にある「季節の恵み」であるとともに、静かな環境でないと聞き取れないささやかな音色であり、作者の左耳の聞こえ具合も表しているように思った。「いつまで拗ねる」という表現はユニークだが、「聞かせてよ」と続くことで、作者の抱える悲哀も感じさせる。二首目、庭を覆うように咲くドクダミの生命力への感動が「而今を思ふ」という結句に表れている。九月集掲載の「小さき花の岩だれ草に蜆蝶ひらひらと来て翅を閉ぢをり」「蛙たちの大合唱にむかへられ蛍の灯る微笑むやうに」にも感じられる、小さな生命を慈しむ作者の心情が良く表れた作品となっている。

＊貴重なる誌面を割いてのこと御礼申します。編集部そしてご執筆の八木康子氏、小田利文氏に謝意を表します。　〈編集室〉

●掲載御礼申します

■「好日」11月号

「受贈歌集紹介」より

冬雷二〇二三作品年鑑

打ち水のされたる夕べひとりゆく柳わかばに肩なぶらせて　　天野克彦

耳近く蜂飛びまはる危険音バイク数台迫り来て去る　　大山敏夫

心経を読みつつをれば息を継ぐこゑのかすれは墨継ぎに似る　　小林芳枝

■「林間」12月号

「受贈歌誌を読む」九月号より

大神輿車椅子からの歓声に応へて施設の奥庭に入る　　黒田江美子

巻き癖も取れて暦は折り返し蝶先立てて茅の輪をくぐる　　田端五百子

■「花實」十二月号

「受贈歌誌秀歌集」九月号より

水きよき与謝の浜辺に寝ころびて寄せくる小砂利の音にまどろむ　天野克彦

看護師も患者のわれも移民なり強き訛りのとつとつ飛び交う　　ブレイクあずさ

どのように妻に言おうか迷いおり病院帰りの車の中で　　山本三男

編集後記

▽新年のお慶びを申し上げます。表紙絵は華やかに咲き匂う「さくら」である。りつこ氏が描かれたこの花に力をもらいながら今年も頑張っていきましょう。

▽「赤彦の一首鑑賞」で赤羽佳年氏の文章を久々に読んだ。鑑賞後半に左千夫の死を赤彦に伝えた茂吉の歌が紹介されていて印象深かった。この欄はどなたでも投稿できるので原稿をぜひ編集室へ。

▽「作品年鑑」が昨年終了したのをきっかけに『短歌研究』掲載の冬雷の広告を新しい文案に切り替えた。このほかの出版社に出している広告も新しいものを考え中。早い時期に切り替えたいと思う。

▽本号には第63回大会、懇親会の様子を詠んだ作品があり嬉しかった。二〇二五年の大会が今から楽しみである。（**桜井美保子**）

▽校正のため誌全体を見渡すと今月号は大会の歌が多く目に留まった。大会後一カ月未満であり会員一同感動まださめやらぬのであろう。13名が詠み41首あった。

▽夫婦間の歌も多く見られた。妻側から夫側からとあり視点の違いが楽しい。妻側から会話がかみ合わないと厳しい指摘がある一方、夫婦睦まじいクルーズ旅や夫婦揃って五十肩という歌も。そして死別の歌は哀切で胸が痛む。土屋文明の妻のように死後最も美しいと言われても。生きているうちに褒め合った方が。（**橘　美千代**）

▽新年おめでとうございます。今年も充実の一年にしたいですね。新表紙絵は《さくら》です。嶋田正之氏のご都合から今年の表紙絵は《りつこ》氏の日本画となりました。花びらに赤みのさした種のようです。

▽島木赤彦の一首鑑賞8として赤羽佳年氏の原稿を得ました。この欄は常に原稿を受け付けていますので、自由にお寄せ下さい。（**大山敏夫**）

▽皆様明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願い致します。今年は巳年。十二支では六番目、動物では蛇に当たる。蛇は脱皮を繰り返すことから巳年には「再生や変化を繰返しながら発展していく年」という意味があるそうなので失敗することがあっても希望をもって励みたい。

▽今年の表紙は、りつこさんの桜。いつ見ても桜はいいなあ、と思う。すてきな年になりますように。

▽大山編集長の「句画集『私の物語　はなのとき』について」は昨年秋に東京都美術館で開かれた「創展」を観た折の歌（十二月号掲載）に続いて書かれたもので興味深い。左時枝氏と谷口桂子氏の句画集『私の物語　はなのとき』（二〇一〇年刊行）についての見解と左氏の今後への期待が解りやすく書かれていて心に沁みる。「創展」には嶋田正之氏の作品があるので私も観させて頂いているので読みながらいろいろな思いが湧いてくる。来年は皆様もどうぞお出かけ下さい。

▽二〇二四年九月刊行の『形容詞・形容動詞の短歌コレクション一〇〇〇』を桜井さんが紹介。歌の核ともいえる形容詞・形容動詞の働きが丁寧に解説されており鑑賞にも実作にも深く役立つ内容で引き込まれる。昨年の大会賞品にもなったが手元に置いて折に触れて読みたい一冊である。

▽九月号に桜井氏が紹介して下さった『モンキートレインに乗ってファイナル』の売上げは冬雷の運営費として活用させて戴きます。ご購入下さった方々に心よりお礼申し上げます。（**小林芳枝**）

▽誤植訂正

12月号p53　小嶋知葉氏の4首目

流音祭　→　龍音祭

作者にお詫び致します。

▽御寄附厚く御礼申し上げます。

稲田正康・匿名一

《冬雷規定・掲載用》

一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。（代表は大山敏夫）

一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九　小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。（事務局は副代表を兼務）

一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。

一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。

一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。

一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。

一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七大山方」とする。

一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。

一、会費は年額（購読料を含む）次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。

＊会費は原則として振替にて納入する事。

A　作品三欄所属会員　一四〇〇〇円
B　作品二欄所属会員　一七〇〇〇円
C　作品一欄所属会員　二〇〇〇〇円
D　維持会員（二部購入）二六〇〇〇円
E　購読会員　八〇〇〇円

一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰め タテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。

冬雷集・作品三欄（メール投稿分）
・担当　大山　敏夫
作品一欄　・担当　桜井美保子
作品二欄・作品三欄（手書き投稿分）
・担当　小林　芳枝

一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。

一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。

《Eメールでの投稿案内》

白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。

一、Eメールによる投稿は左記で対応する。

大山 敏夫　tourai-ooyama@nifty.com
小林 芳枝　k.yosie@nifty.com
桜井美保子　mihoko4966@s4.dion.ne.jp

《選者住所》大山　敏夫　350-1142 川越市藤間 540-2-207　☎ 090-2565-2263
小林　芳枝　125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409　☎ 03-3604-3655
桜井美保子　235-0022 横浜市磯子区汐見台 2-2-2-608　☎ 090-6029-0590

2025年1月1日発行

編集発行人　大山　敏夫
データ制作　冬雷編集室
印刷・製本　㈱ ローヤル企画
発行所　冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話　049-247-1789
事務局　125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替　00140-8-92027
ホームページ　http://www.tourai.jp
頒価　700円